

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

報 告 書

プログラム名	奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業Ⅱ － 2年目教員と3年目教員との主体的・協働的な学び合いによる「学び続ける教員」の基盤づくり－
プログラムの特徴	<p>本事業は、平成27年度に採用2年目の小学校教員を対象に実施した「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業」の成果と課題を踏まえつつ、採用2年目並びに3年目教員という、経験年数の異なる教員同士が主体的・協働的に研修を行う仕組みを新たに開発し、「学び続ける教員」としての基盤づくりを目標として実施した。</p> <p>奈良教育大学、県内小学校及び奈良県立教育研究所の3機関（以下「3機関」という。）により新たに研修システムを開発、推進するための委員会を設置し、県内小学校6校を拠点校として公募・指定して開発を進めた。</p> <p>開発・推進した研修システムは、「センター研修Ⅰ」と「センター研修Ⅱ」の2種の研修を組み合わせて行った。</p> <p>センター研修Ⅰは、3機関の連携・協働の仕組みと、奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業づくりを行う内容によって、拠点校内の2、3年目教員という経験年数の異なる教員間の主体的・協働的な研修を推し進めた。これにより昨年度の取組に比して、拠点校内での経験年数の異なる若手教員の協働体制に広がりが見られた。</p> <p>センター研修Ⅱは、センター研修Ⅰの成果を浸透・普及させるために展開した研修で、当教育研究所で実施する2年次、3年次研修講座と関連付けて実施したもの、Web上での意見交流や質疑応答などの主体的・日常的に取り組むように推進したものと及び公開授業実践の形式で行った参加型研修が挙げられる。センター研修Ⅱの本年度の特徴としては、2、3年次全体研修との関連性を高めたこととWebサイトの改善を図ったことであり、これらにより昨年度の取組に比して、2、3年目教員全体の主体的・協働的な研修への意識の高まりが見られた。</p> <p>今後、本事業の広がりとして、当教育研究所の初期研修講座に本研修システムを組み込んで一般化することや、各市町村に取組の活用や応用を促すことで、若手教員を中心とした主体的・協働的な研修の定着と各学校内でのOJTの活性化を目指す。</p>

平成29年3月

機関名 奈良県立教育研究所 連携先 奈良教育大学

プログラムの全体概要

- 本事業における研修システムの開発や推進、円滑な運営のための立案計画、効果検証等を行った。
- 委員会の構成は、拠点校校長、奈良教育大学教員等及び教育研究所所員とした。



研修システム
開発・推進委員会



H27年度拠点校
3年目教員



- 各拠点校ごとに置き、センター研修Ⅰの指導、支援、運営を行った。
- 構成は、拠点校校長、奈良教育大学教員等、平成27年度拠点校3年目教員（南部F小学校では村内の若手教員）及び教育研究所所員とした。

センター研修Ⅰ

サポートチーム

センター研修Ⅱ

- 北部2校 A小学校（2年目2名・3年目1名）
B小学校（2年目1名・3年目1名）
中部2校 C小学校（2年目1名・3年目2名）
D小学校（2年目3名・3年目3名）
南部2校 E小学校（2年目1名・3年目1名）
F小学校（2年目2名・3年目0名）



拠点校

2, 3年目教員

全体研修「初期研修講座」との関連付け



- 2, 3年次の全体研修の一部をセンター研修Ⅰで行う取組と関連させた内容で実施した。【4日間5講座】

Webサイト「学びの交流」



- センター研修Ⅰにおける授業の記録映像、研修の様子と成果及び指導助言の内容等を、県内全ての2, 3年目教員にWebサイト上に公開し、情報ネットワークの中で、意見交換や質疑応答などを行う主体的・協働的な研修を実施した。【随時】

- 2, 3年目教員が中心となって、主体的に協働して授業づくりに取り組む研修を日常的・長期的に行った。【随時】
- 奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ及び授業省察等の様々な手法による授業研究を行った。校内研修と共催した回もあった。【5月～12月：4回（事前打ち合わせ含む）】

各拠点校での公開授業



- 県内全ての小学校2年目教員を6つのグループに分け、最寄りの拠点校に集めて、拠点校の教員による公開授業、研究協議を行う参加型研修を実施した。【11月～12月：各拠点校1回（センター研修Ⅰ、教育研究所の全体研修と共催）】

拠点校2, 3年目教員を中心とした校内の協働体制の広がり【縦へのひろがり】

成果

2, 3年目教員全体の同僚性の高まり、協働意識の向上【横へのひろがり】

校内○J Tの活性化

若手教員の協働性の活性化

若手教員の資質・能力の向上

（豊かな同僚性・高い授業力・卓越した向上心を身に付けた教員の育成）

I 開発の目的・方法・組織

1 開発目的

平成27年度に、小学校若手教員の抱える以下のような複合的な課題に対応していくために、若手教員自身が主体的・協働的な研修を日常的・長期的に体験することを通して、資質や能力を向上させていくことが有効であると考え、協働的に授業力向上に取り組む仕組みと奈良教育大学の知見を用いた研修内容とを組み合わせ「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業」（以下「平27事業」という。）に取り組んできた。

奈良県小学校若手教員の育成現状から見た課題

- 採用1年目から学級担任として、学級経営、生徒指導、保護者対応等を行わなければならない中、当県の教育課題の一つである「子どもたちの学ぶ意欲が低い」ことを解決するために全教科等にわたる高い授業力が望まれている。
- 1単位時間の授業の組立ては概ねできるが、授業内容に応じて学習形態を適切に選択したり、単元全体の学習過程を構成して組み立てたりする力に課題がある。
- 大量退職、大量採用の影響からの教員の年齢や経験年数の不均衡によって、経験豊かな教員の知識や技能の継承が活発に図れていない。
- 児童の減少に伴う学校の小規模化により、教員が互いに学び合ったり、協働的に授業づくりを行ったりするような同僚性を培いにくい環境になりつつある。
- 当教育研究所が実施する小学校初任者研修では、教員として最低限必要な資質・能力を身に付けるための研修を優先的に行っており、学校等をフィールドにして授業力を高めるような研修を行うまでには至っていない。

【奈良県立教育研究所（平成28年3月）平成27年度 奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業 実施報告書】による】

この研修プログラムは、「センター研修Ⅰ」と「センター研修Ⅱ」で構成して進めてきた。センター研修Ⅰでは、県内5か所の小学校を拠点として、各校で奈良教育大学教員、拠点校の学校長、教育研究所員をメンバーとしたプロジェクトチームを置き、採用2年目教員を対象として、研修の機会を日常的・長期的に提供した。センター研修Ⅱは、センター研修Ⅰにおいて形成された学び合う仕組みを拠点校以外に普及・浸透させることをねらいとして実施した。具体的には、センター研修Ⅰの拠点校で行う研修内容をアクセスを制限されたWebサイトで公開し、意見交換・質疑応答を行い、県内全体の2年目教員が日常的・長期的に学びを得られる仕組みを提供したり、実際にグループに分かれて拠点校に集合し、授業研究を行う参加型研修を実施したりした。

平27事業から、研修システム開発の核となった拠点校2年目教員が、主体的に同僚性を育みつつ、高い授業力を身に付けると同時に、学び続ける教員として向上心を培ってきたことが分かった。また、拠点校以外の2年目教員全体へ、センター研修Ⅰの様子をセンター研修Ⅱを通して広めてきたことにより、2年目教員全体の一定の意識向上も見られた。このことから、本研修システムが小学校若手教員の抱える諸課題に対応していくために有効であり、2年目教員が自らの資質・能力を高めつつ、各校の協働的な学びの中心的存在となって校内研修を展開させていくことや、各学校のOJTの活性化などにもつながる可能性が示唆された。

しかしながら、成果と同時に課題として以下の2点が挙がってきた。1点目は、センター研修Ⅱによって2年目教員全体の協働した授業づくりに対する意識の向上は一定認められたが、センター研修Ⅰの学びに積極的に参画したり、そこで得た学びを実際に自校に当てはめて活用したりするような主体的な姿はあまり見られず、2年目教員全体へセンター研修Ⅰの学びを十分に普及・浸透させることができなかったことである。2点目は、若手教員の育成という観点から、拠点校における教員の協働性の広がりや2年目教員に限定されてしまう傾向が強かったことである。

平27事業の成果と課題を踏まえ、平成28年度は、これまでの研修システムの基本スタンスを踏襲しつつ、挙がってきた課題に対応すべく、若手教員全体へ拠点校での学びを普及・浸透させる「横へのひろがり」と、拠点校における協働的な学びの場としての2年目教員以外への「縦へのひろがり」を重点化した「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業Ⅱ」の取組を進めることにした。

本事業を通して、小学校若手教員の授業力を高め、豊かな同僚性を培い、卓越した向上心を育み、それぞれの勤務校において協働的な学びを展開させるための校内研修等におけるキーパーソンとして活躍するような人材を育成すべく、若手教員の資質・能力の向上を図ることを目指した。

2 開発の方法

本事業において、研修システムの開発や推進、円滑な運営等に関する立案計画、効果検証等を行うために、奈良教育大学、県内小学校及び当教育研究所の3機関により「研修システム開発・推進委員会」を設置した。

そして、県内小学校を拠点校として公募・指定するとともに、それぞれにおいて、主体的・協働的な研修の機会を提供し、若手教員の授業力向上を図ることとした。地域等を配慮した上で、県内小学校6校（北部A小学校、北部B小学校、中部C小学校、中部D小学校、南部E小学校、南部F小学校）を指定した。

研修システムの開発は、「センター研修Ⅰ」と「センター研修Ⅱ」の2種の研修を組み合わせで行った。センター研修Ⅰは、3機関の連携・協働の仕組みと、奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業づくりを行う内容によって、拠点校内の経験年数の異なる教員間の主体的・協働的な研修を推し進めた。センター研修Ⅱは、センター研修Ⅰの成果を浸透・普及させるために展開した。

以上のような平27事業で構築した方法や仕組みは、これまで通り踏襲しつつ、以下に平成28年度「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業Ⅱ」で特に重点化した点について記す。

センター研修Ⅰでは、県内6カ所の小学校を拠点として、研修の機会を日常的・長期的に提供したが、その対象を拠点校の2年目教員と3年目教員に広げた。また、各拠点校でのセンター研修Ⅰの指導、支援、運営等を行う奈良教育大学教員、拠点校の学校長、教育研究所員をメンバーとしたサポートチームを置いたが、その構成に平27事業の拠点校でセンター研修Ⅰに取り組んだ3年目教員を加えた（南部F小学校を拠点校とするサポートチームは村内の若手教員がメンバーとなっている）。このことにより、拠点校内での経験年数の異なる若手教員の協働体制に先述した「縦へのひろがり」が見られると考えた。

センター研修Ⅱでは、2、3年目教員全体へ拠点校での学びを普及・浸透させるために、当教育研究所の初期研修講座である2年次研修、3年次研修との連携を強めたり、情報ネットワークの中で意見交換・質疑応答を行うことで長期的・日常的に研修できるWebサイト「学びの交流」の充実を図ったりするなどして、学び合いのサイクルを推進するための仕組みを強化した。これにより、2、3年目教員全体の主体的・協働的な研修に対する意識が高まり、センター研修Ⅰにおいて形成される学び合いの仕組みを拠点校以外に平27事業の成果以上に普及・浸透するような先述した「横へのひろがり」につなげることができると考えた。

また、取組前後にアンケート調査を実施することで、本事業を検証するとともに、そこから得られた成果と課題を踏まえ、次年度以降、当教育研究所の初期研修講座に本研修システムを組み込んで一般化することや、各市町村に取組の活用や応用を促すことで、更なる若手教員を中心とした主体的・協働的な研修の定着と各学校内でのOJTの活性化を目指したい。

3 開発組織

(1) 研修システム開発・推進委員会組織について

○ 構成

研修システム開発・推進委員会は、奈良教育大学、県内公立小学校及び当教育研究所の3機関によって構成した。

○ 目的

研修システム開発・推進委員会は、「学び続ける教員」としての基盤をつくるため、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業を構成する力を、小学校若手教員自らが主体的・能動的な研修を通して身に付ける研修システムの開発や推進及び効果検証、センター研修の運営に関する立案計画等を行うことを目的とした。

○ 任務

研修システム開発・推進委員会は、次に掲げる各内容を任務とした。

- ・ 研修システム開発・推進委員会の運営に関すること
- ・ 研修システム開発・推進に係る指導助言に関すること
- ・ 事業検証及び「事業実施報告書Ⅱ」の作成に関すること
- ・ その他、この事業に関して必要と認めること

○ 組織

研修システム開発・推進委員会は、奈良教育大学、県内公立小学校及び当教育研究所に所属する者を充てた。担当・役割等に関しては下表のとおりである。

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
	○奈良県立教育研究所			
1	副所長	西上 英雄	事業全般への助言	顧問 委員長 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員
2	参事	土居 正明	奈良教育大学との調整	
3	研修企画係長	辻本 裕明	総務・企画、研修システム開発・推進	
4	教育企画係長	山内 雅雄	総務・企画、研修システム開発・推進	
5	教科教育係長	山本 剛	総務・企画、研修システム開発・推進	
6	ICT教育係長	金子 博和	総務・企画、研修システム開発・推進	
7	研修企画係調整員	井阪 祥美	事業会計全般	
8	指導主事	中澤 隆志	研修システム開発・推進	
9	指導主事	廣見 敦志	研修システム開発・推進	
10	指導主事	西 英樹	研修システム開発・推進	
11	指導主事	平松 康明	研修システム開発・推進	
12	指導主事	吉川 紀子	研修システム開発・推進	
	○奈良教育大学			
13	副学長（教育担当）	宮下 俊也	事業全般への助言	顧問 副委員長 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員 委員
14	教授（教職大学院）	吉村 雅仁	教育研究所との調整	
15	教授（教職大学院）	池島 徳大	研修システム開発・推進に係る指導助言	
16	准教授（教職大学院）	奥田 智	研修システム開発・推進に係る指導助言	
17	教授（教職大学院）	小柳 和喜雄	研修システム開発・推進に係る指導助言	
18	准教授（教職大学院）	粕谷 貴志	研修システム開発・推進に係る指導助言	
19	准教授（教職大学院）	河崎 智恵	研修システム開発・推進に係る指導助言	
20	専任講師（教職大学院）	北川 剛司	研修システム開発・推進に係る指導助言	
21	教授（奈良教育大学）	近藤 裕	研修システム開発・推進に係る指導助言	
22	准教授（教職大学院）	中井 隆司	研修システム開発・推進に係る指導助言	
23	准教授（奈良教育大学）	中谷 いずみ	研修システム開発・推進に係る指導助言	
24	准教授（教職大学院）	前田 康二	研修システム開発・推進に係る指導助言	
25	特任准教授（教職大学院）	樋口 幸三	研修システム開発・推進に係る指導助言	
26	特任教授（教職大学院）	山本 吉延	研修システム開発・推進に係る指導助言	
27	教授（教職大学院）	吉田 誠	研修システム開発・推進に係る指導助言	
	○県内小学校			
28	小学校長	各拠点校校長	研修システム開発に係る指導助言	委員

(2) 研修システム開発・推進委員会の実施

研修システム開発委員会の実施内容等については、次のとおりであった。

第1回研修システム開発・推進委員会 平成28年5月16日（月）

- ・ 地域センター設置及び組織体制の確立
- ・ 研究テーマの報告
- ・ センター研修の計画・立案
- ・ 事前・事後アンケート調査の計画・立案

第2回研修システム開発・推進委員会 平成29年2月27日（月）

- ・ アンケート調査結果による研修システムの検証及び成果と課題についての協議
- ・ 「事業実施報告書Ⅱ」の内容等についての協議
- ・ 開発・推進委員会の設置準備及び移管作業

(3) サポートチームの組織体制及び実施状況

6つの拠点校におけるサポートチームの組織体制及び実施状況は下表のとおりであった。

北部A小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) 平成27年度拠点校教員等 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	5月27日(金)	16:30～17:30	サポートチーム組織 教授 池島徳大 准教授 河崎智恵 平27事業拠点校(北部)3年目教員3名 指導主事 中澤隆志 指導主事 平松康明
	第1日	6月22日(水)	13:30～17:00	
	第2日	10月3日(月)	13:30～17:00	
	第3日	10月12日(水)	13:30～17:00	
センター研修Ⅱ	公開	11月7日(月)	13:15～16:15	

北部B小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) 平成27年度拠点校 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	5月27日(金)	16:00~17:00	<u>サポートチーム組織</u>
	第1日	6月30日(木)	13:30~17:00	教授 吉村雅仁 准教授 中谷いづみ
	第2日	10月12日(水)	13:30~17:00	平27事業拠点校(北部)3年目教員2名 指導主事 平松康明 指導主事 吉川紀子
	第3日	11月15日(火)	13:30~17:00	
センター研修Ⅱ	公開	11月30日(水)	13:15~16:15	
中部C小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) 平成27年度拠点校 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	5月19日(木)	16:30~17:30	<u>サポートチーム組織</u>
	第1日	6月20日(月)	13:30~17:00	特任教授 山本吉延 准教授 奥田 智
	第2日	10月18日(火)	13:30~17:00	平27事業拠点校(中部)3年目教員3名 指導主事 廣見敦志 指導主事 吉川紀子
	第3日	11月 8日(火)	13:30~17:00	
センター研修Ⅱ	公開	11月29日(火)	13:15~16:15	
中部D小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) 平成27年度拠点校 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	5月27日(金)	16:00~17:00	<u>サポートチーム組織</u>
	第1日	6月27日(月)	13:30~17:00	教授 吉田 誠 准教授 中井隆司
	第2日	10月 5日(水)	13:30~17:00	平27事業拠点校(中部)3年目教員3名 研修企画係長 辻本裕明 指導主事 廣見敦志・西英樹
	第3日	10月19日(水)	8:30~12:00	
センター研修Ⅱ	公開	12月 2日(金)	13:15~16:15	
南部E小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) 平成27年度拠点校 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	5月31日(火)	16:00~17:00	<u>サポートチーム組織</u>
	第1日	6月28日(火)	13:00~17:00	教授 近藤 裕 准教授 粕谷貴志
	第2日	9月 8日(木)	14:00~17:00	平27事業拠点校(南部)3年目教員2名 研修企画係長 辻本裕明 指導主事 中澤隆志・西英樹
	第3日	10月21日(金)	14:00~17:00	
センター研修Ⅱ	公開	11月29日(金)	13:15~16:15	
南部F小学校				(上段) 奈良教育大学 (中段) F校と同村内の小中学校 (下段) 奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ・事前打ち合わせ (1日間) ・訪問研修 (3日間)	事前	6月 2日(木)	16:00~17:00	<u>サポートチーム組織</u>
	第1日	7月11日(月)	13:30~17:00	特任准教授 樋口幸三 准教授 前田康二 専任講師 北川剛司
	第2日	9月12日(月)	13:30~17:00	F校と同村内の小中学校 小学校教員 2年目3名・5年目1名 中学校教員 2年目1名・3年目1名 研修企画係長 辻本裕明 指導主事 中澤隆志・廣見敦志
	第3日	10月 6日(木)	13:30~17:00	
センター研修Ⅱ	公開	11月 7日(月)	13:15~16:15	

II 開発の実際とその成果

1 研修システムの内容等

(1) 研修対象

県内小学校に勤務する採用2年目教員(147名)と採用3年目教員(148名)を研修対象とした。

・拠点校教員	北部A小学校	2年目教員	2名	3年目教員	1名
	北部B小学校	2年目教員	1名	3年目教員	1名
	中部C小学校	2年目教員	1名	3年目教員	2名
	中部D小学校	2年目教員	3名	3年目教員	3名
	南部E小学校	2年目教員	1名	3年目教員	1名
	南部F小学校	2年目教員	2名	3年目教員	0名
	合計人数	2年目教員	10名	3年目教員	8名
・サポートチーム	北部A小学校へのサポート	平27年度拠点校	3年目教員	3名	
	北部B小学校へのサポート	平27年度拠点校	3年目教員	2名	
	北部C小学校へのサポート	平27年度拠点校	3年目教員	3名	
	北部D小学校へのサポート	平27年度拠点校	3年目教員	3名	
	北部E小学校へのサポート	平27年度拠点校	3年目教員	2名	
	北部F小学校へのサポート	F校と村内の小中学校	2年目教員	4名	
			3年目教員	1名	
		5年目教員	1名		
		合計人数	19名		

(2) 研修日程及び内容等

研修の日程及び内容等については、下表のとおりであった。

時期	内 容	目 的
4月	研修システム開発委員会の開催(1回) (委員の構成) ○奈良教育大学教員、県内小学校長(北部・中部・南部から公募により6校選出)及び当教育研究所所員等 (内容) ○拠点となる学校にセンターを設置した。 ○センター研修の計画・立案を行った。 ○事前・事後アンケート調査の計画・立案を行った。	○研修システムの開発・推進を目指して奈良教育大学、県内小学校及び当教育研究所が連携・協働する体制を確立する。 ○事前・事後アンケート調査用紙等を作成する。
5月	事前アンケート調査の実施 (対象) ○県内全ての小学校2, 3年目教員 ○2, 3年目教員の勤務する小学校長	○研修システムの検証に生かすため、県内の2, 3年目小学校教員における授業等に関する実態を把握する。
5月 ～ 12月	センター研修の実施(研修システムの開発・推進) ----- (1)センター研修Ⅰ【4回(輪打ち含め計)×6カ所】 (内容) ○各拠点校の2, 3年目教員がサポートチームの指導・助言の下、課題解決のために学び合ったり、協働で授業改善に取り組んだりした。 ----- (2)センター研修Ⅱ【講座、随時、1回×6カ所】 (内容) ○奈良県立教育研究所の2, 3年目教員対象の初期研修講座において、センター研修の成果を共有したり、奈良教育大学の教員を交えて参加型研修で行う授業の検討を行ったり、ア	◎若手教員同士の同僚性を育み、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業を構成する力を高め、学び続ける向上心を醸成する。 ○奈良教育大学での授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチやポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業づくりを行う。 ○拠点校での取組の成果を2, 3年目教員全体に広め、各校での取組に活用する。

	<p>クティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくりに関する協働的な研修を実施したりした。 【4日間5講座】</p> <p>○センター研修Ⅰの授業の記録映像、サポートチームによる指導・助言の内容等を、県内全ての2、3年目小学校教員にWebサイトで公開し、意見交流・質疑応答できる場を設定した。 【随時】</p> <p>○県内全ての小学校2年目教員（147名）を30名程度の6つのグループに分け、最寄りの拠点校に集めて、公開授業を通じた参加型研修を行った。 【1回×6か所】</p>	
12月	<p>事後アンケート調査の実施 (対象)</p> <p>○県内全ての小学校2年目教員</p>	○センター研修の成果と課題を分析・検証する。
2月	<p>研修システム開発・推進委員会の開催（1回） (内容)</p> <p>○事前・事後アンケート調査の分析・検証を行うとともに、6か所で行った研修システムのプロセス等を整理し、研修システムの成果と課題をまとめた。</p> <p>○「事業実施報告書Ⅱ」の内容等について協議した。</p> <p>○研修システム開発・推進委員会の設置準備及び移管作業を行った。</p>	<p>○アンケート調査の分析結果によって研修システムを検証する。</p> <p>○アンケート調査の分析結果や研修システムのプロセス等の整理・検討を、「事業実施報告書Ⅱ」の内容等に生かす。</p> <p>○平成29年度以降に研修システム開発・推進委員会を設置するための準備をする。</p> <p>○平成29年度以降も、研修システムを実施することで、県内全域に普及・定着させるための仕組みができる。</p>
3月	<p>「事業実施報告書Ⅱ」の作成・配布 (内容)</p> <p>○「事業実施報告書Ⅱ」を作成し、県内全ての小学校に配布した。</p>	<p>○本事業の成果として、「事業実施報告書Ⅱ」を作成し、配布する。</p> <p>○「事業実施報告書Ⅱ」の配布によって、研修システムを、県内小学校で普及・定着させる。</p>

(3) 期待される若手教員像

本事業において、若手教員の資質・能力が向上した姿として、目指す教員像を次のとおりに設定した。

①〔高い授業力〕

アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業を構成する力を身に付けた教員

②〔豊かな同僚性〕

日常的・長期的な教育活動の中で、教員自らが主体的・協働的に研修を行い、学び合う同僚性を身に付けた教員

③〔卓越した向上心〕

教員として学び続けていくことのできる力をもった教員

(4) センター研修の概要

センター研修Ⅰ・Ⅱの概要について以下に記す。

センター研修Ⅰ

縦へのひろがり(3年目教員の参加)

- 各拠点校で勤務する2, 3年目教員を対象に、協働して授業づくりに取り組む研修を日常的・長期的に行う。校内研修と共催することも可とする。(月1回×3か月×6か所)
- 奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察などの様々な手法によって効果的に研修を行う。



各拠点校ごとに「サポートチーム」を置き、センター研修Ⅰの指導、支援、運営を行う。

【サポートチームの構成】

縦へのひろがり

(3年目教員の参加)

- ・奈良教育大学教員
- ・拠点校の学校長
- ・平成27年度拠点校3年目教員
(F小学校では村内の若手教員)
- ・教育研究所員

拠点校6校(公募により決定)

北部2校	A小学校(2年目2名 3年目1名)	B小学校(2年目1名 3年目1名)
中部2校	C小学校(2年目1名 3年目2名)	D小学校(2年目3名 3年目3名)
南部2校	E小学校(2年目1名 3年目1名)	F小学校(2年目2名 3年目0名)



Webサイト「学びの交流」

全体研修「フレッシュアップ研修」

拠点校での公開授業

- センター研修Ⅰにおける授業の記録映像、研修の様子と成果及び指導・助言の内容等を、県内全ての2, 3年目教員にアクセスを制限されたWebサイト「学びの交流」で公開し、それを通して情報ネットワークの中で意見交換・質疑応答などを行った。

センター研修Ⅱ



横へのひろがり(Webサイトの充実・改善)



- センター研修Ⅰで行う取組と関連させた内容で、2, 3年次の全体研修(フレッシュアップ研修)を行った。(12講座中5講座)
 - ・2年次全体研修(授業づくり・公開授業・研究協議への参加)
 - ・3年次全体研修(単元構想づくり・協働体制についての協議)

横へのひろがり(全体研修との関連の強化/昨年度は6講座中2講座)

- 県内全ての小学校2年目教員を6つのグループに分け、最寄りの拠点校に集めて、参加型研修(1回×6か所)を実施した。(全体研修と共催)



- 教員の主体的・協働的な研修の仕組み、子どもたちが主体的に意欲をもって学ぶ授業づくりをまとめた「事業実施報告書Ⅱ」を作成し、県内全ての小学校に配布した。



(5) センター研修の実際

センター研修Ⅰ・Ⅱの実際において、平成28年度に特に重点化した「縦へのひろがり」と「横へのひろがり」に関わる取組を以下に記す。

① 各拠点校での取組について

各拠点校で取り組んだセンター研修は、日程も、2、3年目教員の人数配置も、研究のテーマや方向性、取組の進め方、さらにはサポートチームとして取り組む教員の構成も異なっており、多様であった。ここでは、拠点校のセンター研修で見られた取組の中で、特に充実させて進めてきた点について整理して記すこととする。

まず1点目は、今年度は拠点校の3年目教員も協働的な授業づくりに参画していることから、3年目教員自身の研究授業に取り組んだ拠点校もあったことである。6校ある拠点校の中で、3年目教員が在籍しているのは5校の8名である。そのうち研究授業に取り組んだのは、3校の4名で、それぞれが1回ずつ実施した。以下は、3年目教員が研究授業に取り組んだ際の3年目教員、2年目教員の所感の一部である。

《3年目教員の所感》

- ・書くことに苦手意識のある児童が多いと感じていたが、ゴールを明確にしたり、相手をより意識させる工夫をしたりすることで、学ぶ意欲が大きく向上したことに驚き、目的意識や相手意識が大切なことが改めて分かった。
- ・じっくり時間を取れなかったが、それでも空いた時間に教室に行き合ったり声を掛け合ったりしたことでいろんな発想が出てきた。2年目の先生と気兼ねなく授業について意見を言い合える関係がいいなと感じた。

《2年目教員の所感》

- ・2年目の私にも様々なアドバイスを求めていただいた。共に授業づくりをしていることを実感して嬉しく感じた。
- ・よりよい協働をするためには、自分も3年目の先生の学んでいることを的確に理解する必要があると感じた。

3年目教員もアドバイスしてサポートする立場だけでなく、実際に授業研究に取り組んだことで、改めて単元全体を見通した計画立案の重要性に気付いたり、若手教員同士で授業づくりをすることのよさを授業者として実感したりすることができたようである。2年目教員の所感からは、経験年数が上の先輩と同じ立場で授業づくりをすることの充実感と困難さが見て取れた。

3年目教員自身が授業研究を2年目教員と協働して行ったことで、上下関係から互いに遠慮しながらも同じ若手教員として思うことを伝え合えるような、単なる同期同士の関係のみでは見られなかった反応を起こしつつ、単なる授業者と助言者という立場や経験年数の違いを超えて、校内における協働的な授業づくりの関係を縦へと広げることができたと言える。

2点目は、全センター研修のうち、2校で1回ずつ校内研修と共催して行った回が存在したことである。以下がその概要である。

【B小学校 センター研修Ⅰ（2回目：10月）】

①3年目教員の研究授業

- ・サポートチーム、全教職員の参観

②校内での研究協議

- ・担任、学年から
- ・低・中・高学年に分かれてグループ協議
- ・全体交流
- ・指導助言

③サポートチームでの 研究協議



【D小学校 センター研修Ⅰ（1回目：6月）】

①2年目教員の研究授業

- ・サポートチーム、全教職員の参観

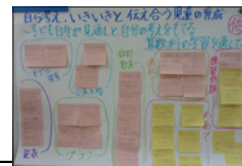
②サポートチームでの研究協議（同時進行）

②校内での研究協議（同時進行）

- ・授業者不在で低・高に分かれてグループ協議

③全体で研修

- ・グループ協議の発表交流
- ・全体交流
- ・指導助言



どちらの拠点校もセンター研修の研究テーマと校内研究のテーマが合致しており、特に本事業について説明せずとも円滑に共催することができた。参加した校内の教職員にとっては、センター研修の概要をつかむとともに、奈良教育大学の専門的な知見を得ることができる機会となった。2、3年目の教員にとっては、センター研修と校内研修の両方で、テーマに関わる内容についての大学教員等の指導を重ねて受けることができ、さらには全教職員から多様に意見を受けることができ、より多面的・多角的に学ぶことにつながったようである。また、サポートチームの3年目教員においては、他校の校内研修に参加するという貴重な経験ができた。

これらのことより、校内における協働的な授業づくりの関係を学校全体へ縦へと広げることが

できたと考えられる。

3点目は、サポートチームとして他校の3年目教員を始めとする若手教員が参画したが、そこに多様な協働体制が現れたことである。

電話、メール、SNS等の通信手段を活用して、センター研修の合間に数回にわたって、授業について助言をしたり、意見交流を行ったりしたチームが見られた。その中には、熱心に取り組む拠点校教員を称えたり励ましたりするなど、精神的にサポートする様子も見られ、チーム内で同僚性を高めてきたことがうかがえた。さらには、夏期休業中に実施した全体で集まる2年次研修、3年次研修の機会を利用して、研修終了後に、チームで集まって顔を突き合わせて授業検討を行う姿も見られた。

そのような中で、特にF小学校を拠点校とするサポートチームにおいては、特記すべき協働体制が見られた。ここでは、拠点校内に3年目教員が在籍しないことや昨年度の拠点校の3年目教員がサポートチームに参加できにくい地理的条件等から、同村内の小・中学校の2、3年目教員を含む若手教員6名がサポートチームのメンバーとなり、協働的に授業づくりに取り組んだ。メンバーの人数が多く、同村内であっても20km近く離れた学校同士も存在し、協働的に学ぶ体制作りが他の拠点校と比して困難な要素が多い中、上記したようなつながりの他に、授業者の模擬授業の様子を撮影した動画を送って意見交流したり、拠点校や拠点校以外の学校等を利用して放課後や休日等に集まることができるメンバーで授業検討を重ねてきたりした。単元の目標設定から指導案の検討、本時の展開検討や模擬授業の実施など多岐にわたって、センター研修の合間ごとに何度も繰り返し、それぞれが自分の授業として主体的に協働的な授業づくりに取り組んできた。

このことから、拠点校という枠を超えた学校間で、経験年数の異なる協働的な授業づくりの関係が生まれたと言え、横にも縦にも広がりが見られたことは成果の一つと考えられる。

② 初期研修講座である全体研修（フレッシュアップ研修）と関連付けた取組について

「フレッシュアップ研修」とは、初任者を始めとする経験年数の浅い教員の割合がこれまでになく高くなっている状況下において、若手教員の育成強化を図るために初任者研修から継続的に本県で実施している2年次研修、3年次研修のことである。平成27年度より2年次研修を新設し、今年度から3年次研修もスタートさせた。初任者研修を含めたフレッシュアップ研修の概要は表1の通りである（本事業と関連付けて実施した講座は●で、それ以外は○で記す）。

表1 本県の初任者研修講座(小学校:校外研修)、フレッシュアップ研修講座(小学校)について

初任者研修(校外研修)	フレッシュアップ研修	
	2年次研修	3年次研修
18日間 39講座	4日間 6講座	3日間 6講座
教科等指導、学級経営、生徒指導、 人権教育、今日的諸課題対応等 について (講座ごとの詳細は省略)	① 教科等指導Ⅰ -3年目教員による2年目研修の報告- ② 生徒指導の課題と解決に向けて ③ 教育相談の実際 ④ 教科等指導Ⅱ -実践的な教科等指導の工夫と授業展開- ⑤ 訪問実践研修Ⅰ -授業力向上を目指した授業研究の取組について- ⑥ 訪問実践研修Ⅱ -教科等の実践的指導方法について-	① 学級経営・教科等指導の在り方について ② 教科等指導Ⅰ -ICTを活用した授業づくり- ③ 特別支援教育の課題と解決に向けて ④ 教科等指導Ⅱ -単元構想を踏まえた授業づくり- ⑤ 人権教育の在り方と指導 ⑥ 教科等指導Ⅲ -授業力向上を目指した協働体制の在り方について-

※ 関連付けて実施しているのは、平成27年度は2年次研修の全6講座中2講座で**⑤**、**⑥**のみ。平成28年度は全12講座中5講座となっている。

【2年次研修との関連】

表1の**①**の講座では、まず、講座担当者から平成28年度行う本事業の概要について、平成27年度の取組を踏まえて説明した。その後、平成27年度の各拠点校に所属する平成28年度3年目教員を1名ずつ招いて、取組を進めてきた具体についての内容と所感、学びの成果を自分なりの言葉で2年目教員全体に伝えてもらった。以下はその際の2年目教員の感想である。

- ・3年目の先生方の話を聞き、今年度1年の研修の流れがよく分かった。また、先輩の先生や同僚と協働して授業をつくることで、よりよい授業が行えたということが3年目の先生方の実感からよく伝わった。
- ・5人の先生方の取組を聞かせていただき、1年しか変わらないのに、自分との違いや先輩方の偉大さを感じた。各学校で様々な取組をしておられ、その1年の成果が先輩方の姿なのだと感じた。共通して他学年との交流の大切さを伝えていただいたように思う。普段は他学年の先生方と話す機会が少ないので、今後は様々な先生方とコミュニケーションを取り、子どもに還元していきたいと思った。
- ・2年次研修を経験された3年目の先生方の現場の生の声を聞かせていただき、本当に意義あるものを感じた。違う学年の授業に対して関わるのは大変だと思うが、その分、なかなかできない貴重な経験を積まれたことが伝わった。私自身も他学年が取り組む校内の研究授業も大切にしていきたい。
- ・3年目の先輩の話聞いて、いろいろな人の力を借りながら授業をつくり上げられた姿がとても格好よく、頼もしく感じた。今年度、私は授業者ではないが、「みんなで授業をつくる」という意識を大切に、共に取り組んでいきたいと思っている。

講座後半では、前半の説明や3年目教員の報告を受けて、今年度拠点校となっている2年目教員がセンター研修Ⅱの参加型研修にて行う公開授業について、2年目教員全体で協働的に授業づくりに取り組む機会を取った。昨年度強めてきた同僚性を生かすため、初任者研修時における班編成を基本として、約150名を拠点校2年目教員の人数である10のグループに分けて、それぞれに単元構想、本時の設定、展開の検討等を行った。以下はその後の振り返りアンケートからの抜粋である。

- ・授業づくりをグループで考え合った時も感じたが、昼食時も班のメンバーと授業内容について話し合ったり、学校の相談をしたりできるような仲間になっていることが大きな財産に思った。
- ・今まで同年齢の先生と授業そのものについての話をしたことがなかったので、とても新鮮で刺激を受けてよかった。授業づくりの話をしていると、どんな学級づくりをしているのかも分かることにも気付いた。
- ・自分が担当する学年でなくても、教材研究を行ったり、先生方と話し合ったりすることで、系統的に担当学年のことも学べることに気付くことができた。
- ・授業づくりで悩んだときに相談できる仲間がいるのといないのとでは全然違うことに気付いた。仲間と考え合う環境があるというのは大切で、そのような学校集団をつくっていききたいと感じた。
- ・なかなか話す機会はもちにくいですが、他の学年の先生方にも相談、質問することが大事だと思った。また、研修会等にも積極的に参加し、情報や助言をもらうだけでなく発信もできるようになっていきたいと感じた。
- ・授業に関しての話合いでは、1年目とは少し違った単元を見据えるような芯のある意見がたくさん出ていた。経験を重ねることで成長することに気づき、このような機会は意義があると感じる。
- ・同期の仲間と考えたことを気張ることなく伝え合うことができ、協働して授業をつくるよさを少しでも実感できたように思う。子どもにもこのよさを伝えたいし、自分も今回のように話し合える仲間をもちたいと思った。
- ・自分1人で考えるよりも数人で意見を出し合うと、とても創造的で深まりを実感した。このことは子ども間でも言えることで、学び合うことの利点は様々な場面に存在していることに改めて気付くことができた。



- ・Webを利用して、たくさんの先生方の授業が見られるのが楽しみだ。気軽にコメント、質問などをして、盛り上がればよいなと思っている。
- ・同じ2年目や3年目の先生の取組を見ることができるのは、とても興味があるし、参考になると思う。これからもWebをチェックしたいと思っている。

表1の⑤、⑥の講座は、参加型研修（拠点校での公開授業）で行ったものである。奈良市を除く県内全ての小学校2年目教員が6つのグループに分かれ、最寄りの拠点校に集合してそこで行われる2年目教員の授業公開を参観（講座⑤）し、それについての話し合いを中心に研究協議・講義（講座⑥）を実施した。参加した2年目教員の振り返りアンケートからの抜粋を以下に記す。

- ・2人の同期の授業を見せていただいて、とても刺激を受けるとともに、自分はこれだけの授業が行えているのかという焦りも感じた。これまでの積み重ねを力に変えてこられた姿を見て、学び続けることの大切さを改めて考えさせられた。今回このような学び合いの場を設けていただいたことに感謝している。先輩教員から学ぶことももちろん多いが、同じ目線で語り合えることもとても楽しかったし、勉強になった。
- ・単元全体も1時間の授業づくりも、教員自身が明確な目標をもって進めることが大切だと授業と協議、講義を通して改めて気付いた。「早く自分のクラスでも授業がしたい!」「自分も同期に負けず頑張りたい」という思いが強くなり、今日学んだことを明日から生かしていきたい。
- ・普段見ることのできない同期の先生の授業を拝見できてよかった。私も先輩の先生と相談して、授業づくり、規律づくりをしていこうと思った。協議や講義では、大学の先生方の授業者への助言や指導が直接私自身に当てはまるものがたくさんあり、学び多くいい刺激になった。
- ・大学の先生の講義を聞いて指導事項の位置付けが自分の中で明確になり、専門的な知識の大切さを痛感した。
- ・学年や学校を越えて意見交流させることが自分の視野を広げることに直結することを実感した研修となった。今後も授業力の向上を目指して学びの専門家として同期と協働して力をつけたい。
- ・授業をしてくださった先生、拠点校の先生方、また奈良教育大学の先生方、サポートチーム3年目の先生方、教育研究所の先生方、たくさんの先生方が私たちの学びのために関わってくださっていたことを改めて実感し、恵まれていることに感謝すると同時に、この学びをしっかりと子どもたちに還元していきたいと思った。

【3年次研修との関連】

表1の④の講座では、平成27年度の取組終了（センター研修Ⅱの公開授業）後に全員で集まる機会が取れなかったので、講座担当者から平成27年度に行った本事業の全体概要について、各拠点校の教員全員から所感を含めた具体を報告してもらいつつ、振り返りとまとめを行った。それを受けて、「先生たちが協働して授業を考える場は大切だと改めて感じた。」「拠点校の先生方が年間を通して力を付けられてきたことが伝わった。」「私も自分なりの指針をもち、周りの先生とともに頑張っていきたいと感じた。」「拠点校の先生の話聞き、大きな山を乗り越えた同期を頼もしく思って刺激を受けた。」というような感想が見られた。

また、その後、単元全体の授業構成を考えることや活動に合わせて授業形態を工夫することに対して身に付いていないと感じる若手教員の割合が多かった、という昨年度の事業実施に至る背景の一角となった課題を鑑み、協働学習を取り入れた単元全体の授業構想に取り組む研修を実施した。3年目教員約150名が自分が学んでみたい学年や教科等で2～4人程度のグループに分かれ、協働学習を取り入れた単元全体の授業構想に取り組んだ。そして、その内容をA3用紙1枚程度にまとめて、ポスターセッション形式で全体で発表交流を行った。以下がその学びの振り返り（一部抜粋）である。

- ・その場その場での授業になりがちだが、子どもたち同士の関わり、学び合いを取り入れながら、単元全体の流れを考えることはとても大切だと分かった。
- ・単元構成について全体の流れを考えてポイントを絞って授業を進めていくことの重要性を学ぶことができた。この場で単元構成を考える練習をさせていただいたことが自分にとって有意義なものになり、有難かった。
- ・単元のゴールを決めてからそのゴールに向かうためにどんな手立てが必要かという授業の組み立て方をすると、見通しをもちやすいということを改めて感じ、スモールステップでの学習が考えやすくなった。
- ・ゴールを見据えて授業の山場をどこにもってくるのか、最終的にどんな力を次の単元・学年に向けて身に付けさせたいのかを明確にして、これからも授業を組み立てたい。
- ・同期と学び合う中で、深く考えないと分からない指導方法も見つけ出すことができた。単元全体を見つめると、指導の系統性もイメージでき、次の学年のことも考えた授業づくりの大切さにも気付くことができた。
- ・同じ3年目ということで発言もしやすく一緒に悩みながらも考え合うことができ、とても有意義な時間となった。今後も同期や同僚と協力しながら授業づくりに取り組みたいと思う。
- ・同期の人たちと何か自分たちでできる工夫はないかと気兼ねせずに互いに気楽に言い合う中で、たくさんのアイデアが出てきて楽しかった。職場ではまだまだこのような状態ではないが、意気込まずに様々に話し合える関係づくりから進めていきたい。

- ・他校の同期の先生と教材を練ることで新たな視点が加わった。学校や学年が違くと子どもの様子が変わり、授業全体の構成も改め直す必要があると感じた。同じ単元を同じ仲間と練り合うことが本当に学校で実現できたら楽しくなるだろうなとわくわくした。この気持ちを学校現場にもち帰って先生方と教材研究をしっかり行っていきたいと強く感じた。
- ・今回は3年目の仲間と授業づくりをしたが、学校へ帰ったら同じ学年の先生方はもちろん、他の学年の先生方とも年に数回でもいいので単元を通した授業づくりを一緒にしていきたいと思った。
- ・自分の考えを勇気をもって伝えると、同期から笑顔で「いいね!」と言ってもらえてとても安心した。大人も子どもも最初はみんな不安だと思う。その不安を乗り越えられる学級づくり、学習指導の工夫をこれからもしていきたいと思う。
- ・私たちがこの研修の取組で協働的に学ぶよさを実感できたことで、子どもに還元できていくのだと感じた。



表1の⑥の講座は、今年度の拠点校における授業公開が全て終了してからの開催（12月28日）であり、3年次研修の最終講座でもあるので、本事業のまとめと関連付けつつも、今後の中堅教員に向けての自身の資質や能力向上について意識付けできるような内容が相応しいと考えた。そこでまず、3年目教員全体に講座担当者から2年間の事業の成果と課題について説明し、拠点校ごとに分科会として分かれて今年度の取組の詳細についてサポートチームとして入り込んだ3年目教員から、サポートする立場としての所感を伝えてもらった。それらを踏まえて、「今後の学校を中心とする教員の協働体制はどうあるべきか、またその中において自分がどんな役割を担うべきか」というテーマでグループで協議して分科会ごとに発表交流を行った。最後にその内容を受けて、各分科会で奈良教育大学の教員等から講義を受けた。以下、振り返りの一部を示す。

- ・同じ市内の先生方と交流することで、校内の協働体制の相違点や類似点について様々に考えさせられた。学校だけでなく校外との協働も意識して交流の機会を自ら増やしていきたいと思った。
- ・今回の研修で同僚との協働は元より、先輩や管理職、後輩とも協働していくことが大切だと分かった。
- ・自分は中堅となりつつあることを意識させられた。学校で必要な教員となるように、授業力、人間、組織づくりなど、学び続けていこうと考えさせられた。4年目に向けていい刺激になる研修内容だった。
- ・同期と遠慮無く本音を語り合う中で、3年目になるとそれぞれが自分たちの学校のことがよく見えるようになっていくことが自覚でき、初任の頃に比べて深い話合いができるようになったと実感できた。
- ・3年目になってもこうして学べるのが有難いと感じた。研修のテーマも分かりやすく、交流が活発に行われ、自分にとって深い学びにつながった。また、2年目や同期の先生方の頑張る姿に大きな刺激を受け、自分も今後は主体的に働きかけ、縦・横のつながりを大切に学び続けていこうと心に決めた。
- ・奈良教育大学の先生のお話から、教員の仕事の深さを感じた。今日の研修をきっかけに、専門性を高める学びに目を向けるとともに今後の自分の在り方、進み方について考えていきたいと思う。
- ・今まで聞くばかりだった立場から、聞かれる立場になることに気付き、奈良教育大学の先生言葉から、自分の「強み」を作ろうと思った。



- ・自分の授業に自信がもてると、教員間の協働にも主体的に関われると感じた。
- ・担任をもっていると個人主義に陥って、1人で悩んでしまうようになるので、自分からコミュニケーションを取りつつ教材研究を進めていきたいと感じた。
- ・3年目が2年目の研修に参加していると聞き、縦のつながりの大切さを改めて感じた。今後もチームになることの意味を忘れずに取り組んでいきたい。

以上のことから、当教育研究所の初期研修講座である全体研修に関連付けた取組によって、受講した2, 3年目教員の主体的・協働的な授業づくりに対する意識の高まりが、所感からうかがわれた。

③ フレッシュアップ研修Webサイト「学びの交流」について

センター研修ⅡのWebサイト「学びの交流」による主体的・協働的な研修の概要と本年度の改善点及び今後に向けての展望等について下に示す。

ア 年度当初から10月までのWebサイト「学びの交流」

昨年度同様、「学びの交流」は教育研究所のWebページのコンテンツ内にある。

共通のID、パスワードにより制限されたフレッシュアップ研修Webサイト「学びの交流」にアクセスできる。

各小学校のボタンをクリックすると、センター研修の様子が分かるページが表示される。(昨年度分含む)

Webサイトコンテンツ

【研修の様子と成果：PDF文書】

6月30日(水) 生駒南小学校 センター研修Ⅰの第1日目が終わりました。

4年生国語「自分の考えを伝えるには」

センター研修の授業や研究協議の様子と成果がまとめられた文書を閲覧できる。

【研修の様子と成果：動画】

原本先生の授業 第5学年 算数「三角形の面積」

センター研修の授業や研究協議の様子を編集した記録映像を視聴できる。

【フレッシュアップ研修だより：PDF文書】

フレッシュアップ研修だより

意見・感想

2, 3年目教員のセンター研修Ⅰに関する意見や感想、それに対する大学教員の助言等をまとめた文書が閲覧できる。

【意見・感想】

感想・意見・質問

送信フォームから、センター研修の意見や感想を送ることができる。(送り先は教育研究所)

イ 10月から新たにリニューアルしたWebサイト「学びの交流」

教育研究所のお部屋

グループスペース

フレッシュアップ研修

- 大和郡山立東山西小学校
- 生駒市立生駒東小学校
- 福原市立秋保東小学校
- 香芝市立下田小学校
- 五條市立宇智小学校
- 十津川村立十津川第一小学校
- 昨年度の拠点校

研修機関	研修期間
●フレッシュアップ研修講座(各年目)小学校開催要項(4日)	
大和郡山立東山西小学校	11月 2日(水)
生駒市立立東山西小学校	11月 7日(金)
福原市立秋保東小学校	11月 20日(水)
香芝市立下田小学校	11月 29日(金)
五條市立宇智小学校	12月 2日(月)

Web上にある無償の情報共有基盤システムを活用して作成したWebサイト「学びの交流」を従来のものから変更して新たに開設

- 《主な改善点と期待できる効果》
- ①従来型では、メールにて教育研究所に送信された2, 3年目教員や大学教員等の意見や感想を集約して、「フレッシュアップ研修だより」としてWebアップしていた。そのため、意見や感想は単方向的であり、受け手側とのタイムラグも生じていたが、「掲示板」モジュールを使用すると、感想や意見を随時書き込むことができ掲示される。そのため、リアルタイムに双方向、多方向に意見交流ができ、センター研修Ⅰの学びを2, 3年目教員全体に広めることが容易となる。
 - ②共通のID、パスワードにてコンテンツ内にアクセスした後、個々の2, 3年目教員に対してユーザIDを発行してパスワードを設定することにより、さらに限られた中でのシステムとなり、セキュリティ面が大きく向上するため、情報の公開範囲が拡大できる。

《現段階での状況と今後への展望》

変更が年度途中となったため、リニューアルしたWebページの利点や活用方法等について十分に周知できなかった。そのため、Webページへのアクセス数も従来のものと比べて大きな変化がなく、充実の可能性がある「掲示板」モジュールも十分に有効活用できていない。また、情報公開の範囲も年度途中導入のため、当初と変わらない程度で進めている。来年度に向けて、周知活用の徹底と充実したコンテンツへの改善に向けて検討中である。

2年目教員の意見・感想(一部抜粋)

- ・同じ世代の人の授業を見る機会があまりないので、とても新鮮だった。同期が頑張っている姿はとても刺激になった。
- ・同じ学校に同期の先生がいて、協働しながら意見を交換したり、新しい発見ができたりすることは羨ましく思う。同期はいなくても、自分も若手の先輩と一緒に学んでいきたいと思った。
- ・ただ楽しいだけの授業ではなく、そこから何を子どもたちに学ばせたいか、私自身もしっかり考えて授業していきたい。実際に授業を参観しなくなった。
- ・「一緒に奈良県の先生になろうね。」と共に励まし合った人がこのように公開授業をしていることが頼もしく、とても尊敬している。「学び合い」の授業は難しいと感じるが、私自身もこれからのこの研修で、少しでもつかみ、子どもたちに還していけたらと思っている。

Ⅲ 連携による研修についての考察

(1) 本事業の検証

本事業を行うに当たり、若手教員の資質・能力の向上のためには、若手教員自らが主体的・協働的な研修を日常的・長期的に体験することが有効であるという仮説の下、従来の当教育研究所での集合・一斉研修の形態ではなく、県内6つの小学校を拠点として、採用2年目教員並びに採用3年目教員同士が授業改善に取り組む研修の仕組みと奈良教育大学のもつ様々な知見を用いて授業力を高める内容との二つの柱から構成する研修システムの開発・推進を行ってきた。

したがって、本事業の効果を考察するに当たり、この仮説の有効性を検証する。

なお、検証するに当たり、2, 3年目教員を対象に、センター研修Ⅰの1回目開始前の5月と、センター研修Ⅱの参加型研修終了後の12月に実施した事前・事後アンケート調査^{*1}の結果を分析するとともに、平27事業における成果や課題とも比較することで、経年的にも分析したいと考える。

まず、本研修システムが、若手教員の同僚性を高め、協働して授業づくりに取り組む素地^{かんよう}を涵養できたか検証したい。

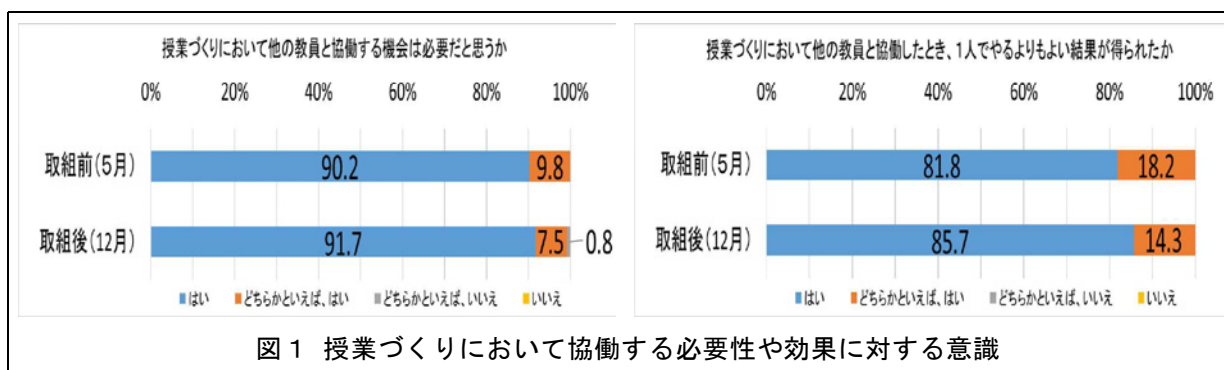


表1 協働する機会を必要に感じる協働学習のよさについて自由記述した初回と最終回の内容の比較 (一部の抽出教員)

教員	取組前(5月)	取組後(12月)
A教員	自分の知らない知識を学べるからです。	協働した結果、よりよい授業づくりに向けて知見を広げられると思うから。
B教員	自分だけでは気づかないことがたくさんあるから。	自分では気づかない点に気づき、よりよい活動を考えることができるから。
C教員	多種多様な意見や、経験から練られた授業の構想を聞くことができるから。	協働することでタイムリーに悩みが解決される場合や、よりよい授業展開を考えられる場合もあると思うから。
D教員	いろいろな考えを持つことができる。	児童と一緒に、協働していくことで、より可能性を持った指導につながっていくと思うので。
E教員	自分では気が付かない観点からアドバイスをしていただけるため。	新旧の知識やスキルが融合してよりよい教育を作れる機会であると思うから。
F教員	先輩教員・同僚教員の成功例等を聞く事によって自分の授業に応用できるから。	児童が授業を受けて楽しいと感じるために、自らの研究と周りの教員の意見が必要だと感じるから。
G教員	協働することで、様々な知恵やアドバイスを頂き授業がよりよいものになっていくと考えるから。	協働することでよりよい指導ができるようになり、連携を強めることにつながるから。
H教員	技術などを教えてもらえるから。	協働することで深い学びに繋がると感じるから。
I教員	いろいろな意見を参考にできるから。	広く多角的な視点から授業づくりに臨むことができるため。
J教員	先輩教員の話聞くことでさらに良い授業を作ることができるからです。	一人の視点で作る授業よりも、よい授業ができるから。
K教員	自分1人では考えられないことに気付いてくれたり、アドバイスしてくれたらから。	ねらいに迫ってさまざまな方法を共有することができると思うから。
L教員	様々な授業の仕方について学ぶことができ、視点も広げることができるから。	協働によって、様々な視点から授業を考えることができ、よりよい授業づくりに繋がると思います。
M教員	的確な意見やアドバイスをいただけるから。	一人で行き詰まることも多く、色々な先生のアイディアを参考にして、よりよい授業をつくっていきたいから。

※ 抽出教員の自由記述の回答の一部を省略して記載している。

図1は、2年目教員全体に対して、授業づくりに対して教員同士が協働する必要性や効果に対する意識について問うた結果を取組前後で比較したものである。また表1は、協働する機会が必要だと感じる理由を自由記述した取組前後の内容を比較したものである。

図1から、全体的に取組後には協働する必要性や効果についての意識は高くなっていることが分かる。また表1から、必要に感じる理由についても、取組前は、聞いたり助言を受けたりして、自分自身の学びにつながる面にしか目を向けられていない記述が目立つが、取組後は比して、協働によって深く広い授業研究ができるよさから、よりよい授業や教育につながるという観点からの記述に変容していることが見て取れる。

*1 小学校2年目教員と3年目教員を対象とした事前・事後アンケート調査 (事後は2年目教員のみ対象)

奈良県立教育研究所 (事前:平成28年5月実施/事後:平成28年12月実施)

「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業に係るアンケート」(未公開)

(事前配布数:2年目教員147人・回収数133人・回収率90.5%/3年目教員148人・回収数133人・回収率89.9%)

(事後配布数:2年目教員147人・回収数133人・回収率90.5%)

必要性についての回答において、取組後に「どちらかといえば、いいえ」と回答した者が1名（図1の0.8%）いた。理由として、「機会は必要だと思うが、今の自分の状況から時間を作れない。実力がついてから機会をもちたいと思ったから。」と記述しており、自己の力量として余裕がないことを挙げているが、協働の程度の問題に拠るもので、必要性は十分に感じているものと推測される。

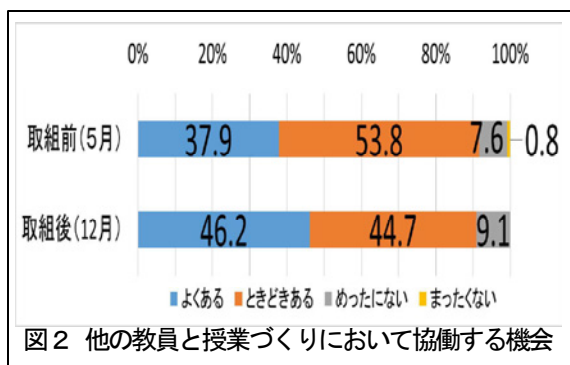
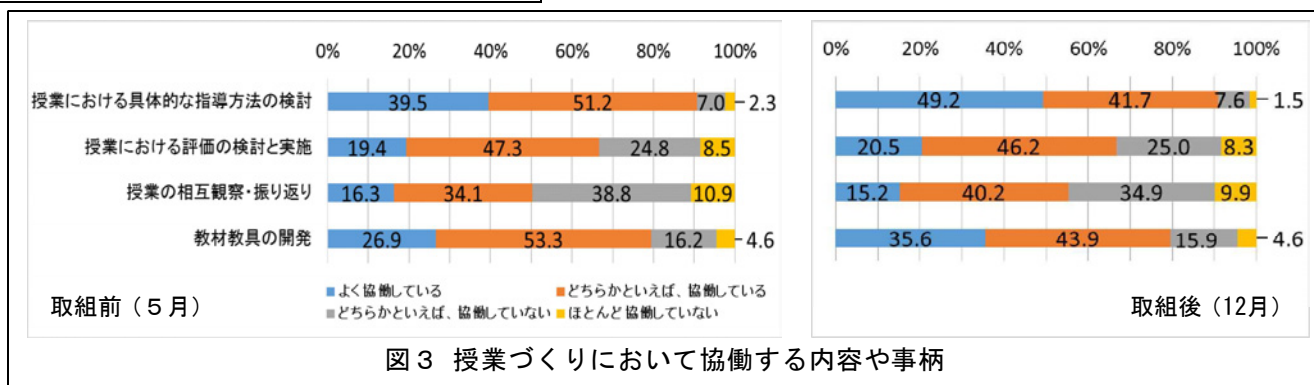


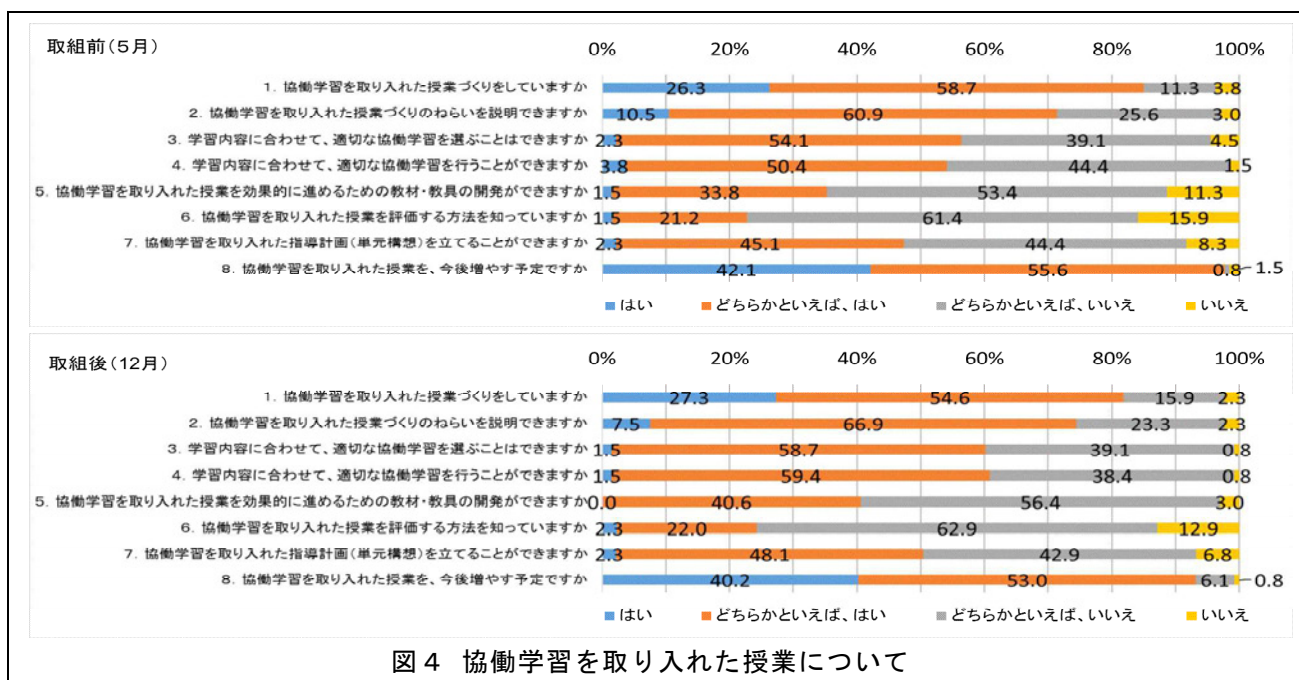
図2は、2年目教員全体に対して、授業づくりにおいて他の教員と協働する機会について問うた取組前と取組後の結果である。「よくある」と回答した割合が、取組後には8.3ポイント上昇しており、実際に協働する機会を増やしてきたことが見て取れる。一方で、「めったにない」という回答は無くなったが、「まったくない」と回答した割合は微増していた。図1や表1から、協働する必要性や効果については十分に意識できているので、協働的に授業づくりに取り組みたいと思いつつも、実際には諸事情によって機会として取れていないことが原因と思われる。



2年目教員全体に対して、授業づくりにおいて協働する内容や事柄に関する調査結果を示した図3からは、頻度の差はあるが、どの項目においても肯定的な回答の割合は、増減がないか微増した結果となった。特に、「授業における具体的な指導方法の検討」、「教材教具の開発」の項目において「よく協働している」と回答した割合は、取組後にどちらも10ポイント近く上昇しており、授業づくりの具体的な指導の工夫に関して協働する機会が多いことが分かる。

次に、本研修システムにより、協働的に授業づくりに取り組む中で、若手教員全体の傾向として授業力が高まったかということについて考察したい。

図4は、2年目教員全体に対して、協働学習を取り入れた授業について問うた結果である。これを見ると、肯定的な回答の割合は質問項目1、8以外は僅かではあるが増加傾向にある。センター研修への参加により、少しずつ協働学習への自分なりの理解が進んできたよううかがえる。



一方で、質問項目1「協働学習を取り入れた授業づくりをしていますか」、質問項目8「協働学習を取り入れた授業を、今後増やす予定ですか」に対して否定的な回答の割合が微増している。理由として、質問項目8で否定的な回答をした理由の一部を抜粋したもの（表2）から、取組前は純粹に知識や技術が伴っていないことを挙げていたが、取組後は自分の現状を認識した上で判断して挙げていることが分かる。これは、拠点校で取り組む協働学習について、センター研修Ⅱにて学んできた中で、改めてその難しさや課題に触れることで、自分のこととして向き合って判断した結果であると考えられ、それだけ協働学習についての理解が進んできたことが推察できる。

表2 協働学習を取り入れた授業を増やすことに否定的な回答をした理由を自由記述した初回と最終回の内容の比較（一部の抽出教員）

取組前(5月)	・増やしていきたい思いはあるが、どのように進めていけばよいか分からないから。	・協働学習の意義は理解できるが、それを実践に生かせるだけの技術が伴わないから。
取組前(12月)	・協働学習についての知識がまだ自分の中には少ないから。 ・現在くらの頻度でちょうどよいように感じるから。 ・単元で重点を置きたい内容では取り入れたいが、毎時間するのは、進度に不安があるから。	・協働学習の本質を十分に理解していないから。 ・協働学習をした方が効果的な単元とそうでない単元があると思うから。

※ 抽出教員の自由記述の回答を一部省略して記載している。

これらのことから、また全体研修と関連付けた取組の所感等からも、若手教員全体の傾向として、授業力そのものが全体的に向上したか否かについては、確証は得られなかったものの、センター研修Ⅱの学びから、協働学習を取り入れた授業づくりについて、一定の関心の高まりと理解の深まりは認められた。

次に、本研修システムにより、協働的に授業づくりに取り組む中で、教員としての学び続ける姿勢や意識は向上したかということについて考察したい。

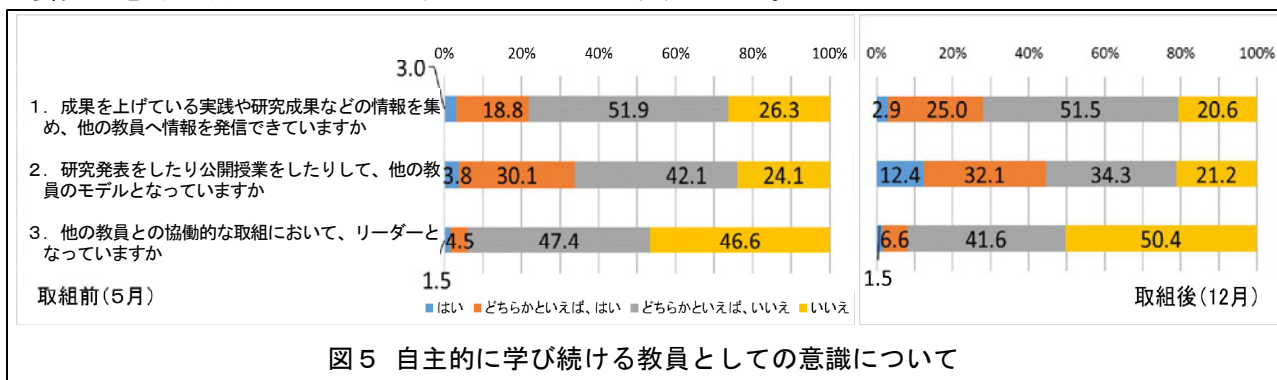


図5は、2年目教員全体に対して、自主的に学び続ける教員としての意識について問うた取組前後の結果である。これを見ると、どの項目においても肯定的回答の割合が上昇していることが分かる。中でも、質問項目2の肯定的回答の割合は10ポイント以上増加しており、他項目の変容と比して大きいことが見て取れる。

このことより、2年目教員全体の傾向として、本研修システムで得た学びを活用して、主体的に研究授業等に取り組み、情報発信してきたこと、また、それらを通してモデル意識を向上しつつ、自主的に学び続ける教員として向上心を高めてきたことがうかがえた。

次に、これまでの結果分析に重複する部分もあるが、平27事業における取組の結果との経年的な比較による分析もしたいと考える。

図6は、平成28年度の2年目教員と3年目教員の結果*2を年を経過で示したものである。

「授業づくりにおいて他の教員と協働する機会が必要だと思うか」という質問に対して「はい」と回答した割合は、取組後には高くなっており、センター研修を通して協働の必要性を実感してきたことが考えられる。

協働して授業づくりに取り組む機会の変化について表した図7によると、「他の教員と授業づくりにおいて協働する機会」が「よくある」と回答した割合が、平成27年度を取組前後では0.2ポイント微減したが、平成28年度を取組前後では8.3ポイント上昇した。これは平成27年度に課題としていた拠点校以外への研修システムの成果の普及が一定達成できたものと考えられる。

*2 平成28年度3年目教員の「H27(5月)取組前」と「H27(12月)取組後」の結果は下記の実施報告書による（以後の平成27年度の結果の記載についても同様に同報告書による）

奈良県立教育研究所（平成28年3月）

「平成27年度 奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業 実施報告書」

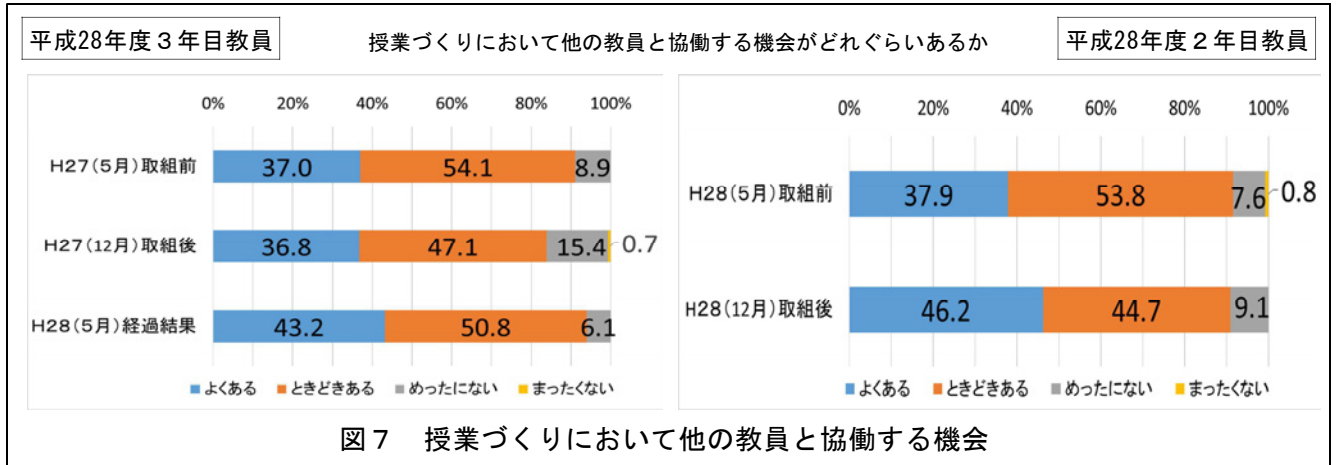
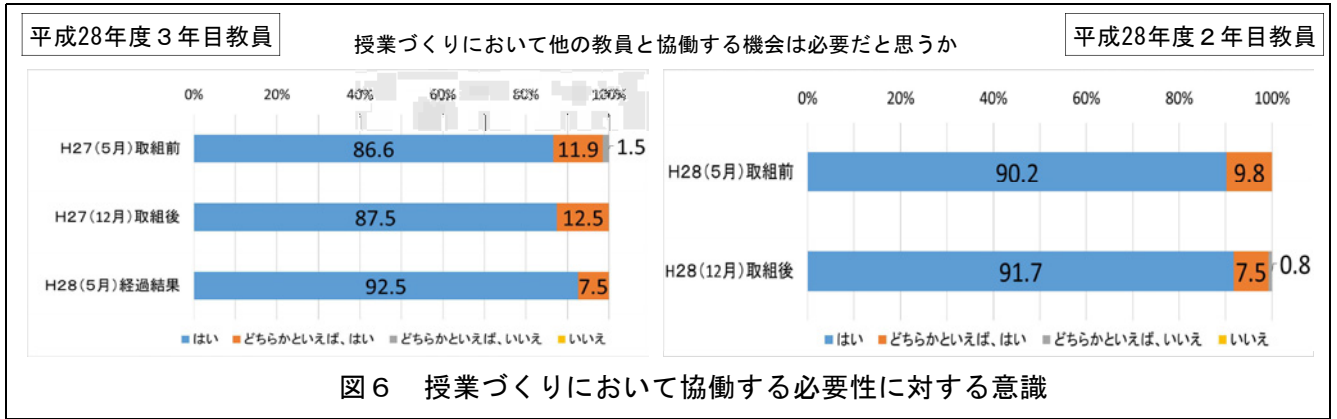
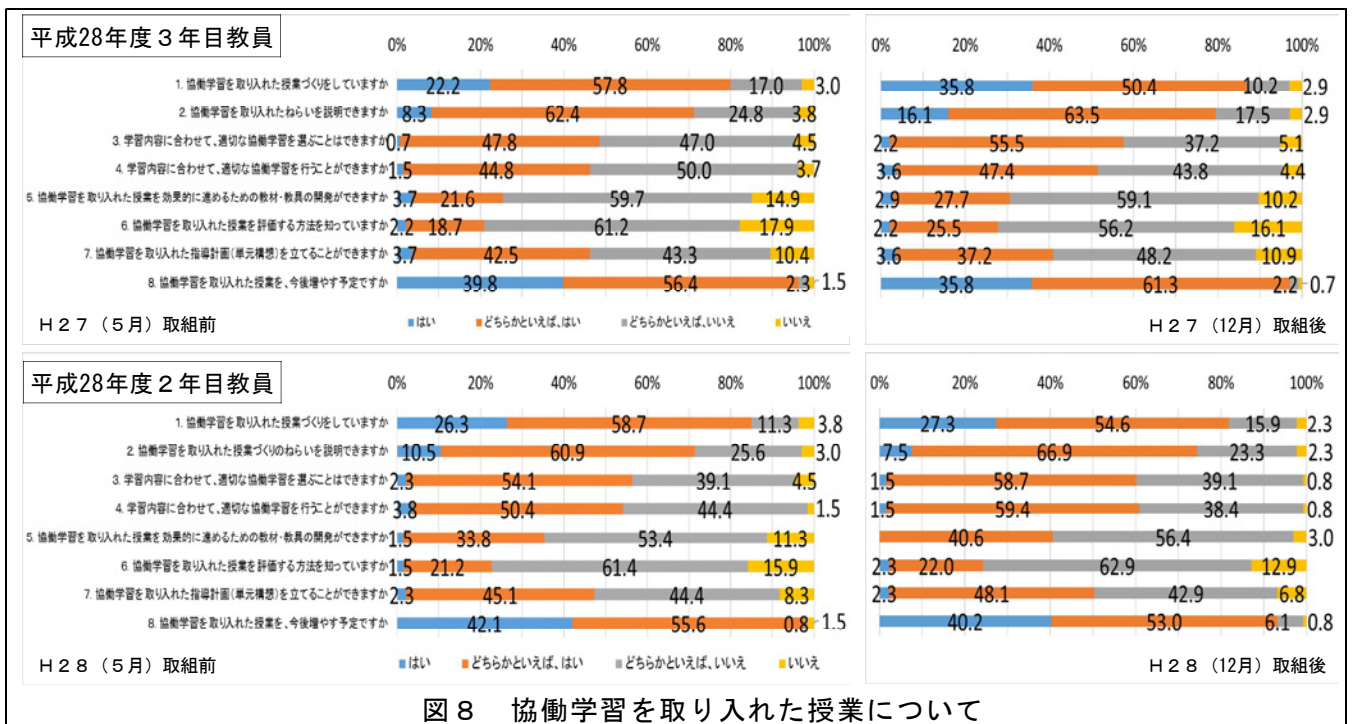


図6, 7から、平成28年度3年目教員の平成27年度の取組が終了した後の平成28年5月の結果を見ると、それぞれ「はい」、「よくある」と回答した割合は、取組終了直後の平成27年12月の結果より上昇していた。これは、平成27年3月に全小学校へ配布した平成27年度の「実施報告書」による取組全体の周知や報告書の記載内容を生かした研修システムの活用に取り組むところが大きいと思われる。また、Webページ「学びの交流」による主体的・協働的な研修が平成28年度に入っても継続的に行われてきたことも意識の向上や機会の増加につながったと推測される。

また、協働学習を取り入れた授業づくりの取組状況について表した図8によると「協働学習を取り入れた授業について」の8つの質問項目で調査したところ、「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した割合の変化は、平成27年度の取組前後では質問項目7以外、平成28年度の取組前後では質問項目1, 8以外の全ての項目において上昇が見られた。



単元全体の学習過程を構成して組み立てることに関わる質問7の項目に対する肯定的な回答の割合が、平成28年度を取組では3.0ポイント上昇していることから、課題解消に向けて年度を経て取組が改善されてきたことがうかがえる。しかしながら、授業内容に応じて学習形態を適切に選択することに関わる質問3, 4, 5の項目に対する平成28年度を取組前後の肯定的な回答の割合の上昇は、平均して5.3ポイントにとどまり、平成27年度の6.4ポイントに比して低かった。

以上から、拠点校の2, 3年目の教員が資質・能力を向上させてきたことに加え、核となったセンター研修Ⅰの様子をセンター研修Ⅱを通して広めてきたことにより、2年目教員全体の協働的な授業づくりに対する意識の向上が見られたことを始めとして、若手教員を中心として一定の協働性への意識の広がりがうかがえた。

(2) 本事業の成果と課題

本研修システムの開発は、若手教員自身が豊かな同僚性を発揮しつつ協働的に授業づくりに取り組む中で、授業力を高め、学び続ける教員としての向上心を培うことをねらって取組を進めてきた。

今年度は特に、昨年度の課題として挙がってきた2年目教員全体へ拠点校での学びを普及・浸透させる「横へのひろがり」と、拠点校における協働的な学びの場としての2年目教員以外への「縦へのひろがり」を重点化した。小学校採用2年目教員並びに平成27年度事業で研修を経験した3年目教員という、経験年数の異なる教員同士が協働で研修を行う仕組みを新たに構築し、全体研修との連携を強めたり、Webサイトを充実させたりして、学び合いのサイクルを推進するための仕組みを強化して取組を進めてきた。

分析と考察の結果から、本取組を通して、拠点校の2, 3年目教員が主体的に同僚性を育みつつ、高い授業力を身に付けると同時に、学び続ける教員として向上心を培ってきたことが分かった。また、拠点校内の経験年数が異なる教員集団や、拠点校以外の若手教員全体へ、核となったセンター研修Ⅰの様子をセンター研修Ⅱ等を通して広めてきたことにより、2年目教員全体の協働的な授業づくりに対する意識の向上が見られたことを始めとして、若手教員を中心として一定の協働性への意識の広がりがうかがえた。

以上のことから、本年度の研修システムが小学校若手教員の抱える課題や育成状況に対応していくための資質・能力の向上のために昨年度に比してさらに有効であり、若手教員が各校の協働的な学びの中心的存在となって校内研修を展開させていくことや、各学校のOJTの活性化などにもつながる可能性が示唆された。

さらに、教育研究所の研修講座である2, 3年次研修との関連性を強めたことで、今後、研修講座の体系に本研修システムを組み込んで一般化できる蓋然性が高まったこと、指導主事が拠点校に入り込んでセンター研修を進めてきたことで獲得した奈良教育大学の知見や新たな研修様式の在り方等を、今後の指導や支援、訪問型研修講座の展開などに活用できることなど、当教育研究所のこれからの研修体系のシステムに関わっても大きな収穫が得られた。

今後の課題としては、今年度、校内研修等によって広がりが見られた拠点校における経験年数の異なる教員集団との「縦へのひろがり」と、全体研修やWebサイト等のセンター研修Ⅱによって広がりが見られた拠点校以外の2, 3年目教員全体への「横へのひろがり」をさらにどう充実させていくかという点が挙げられる。若手教員と先輩教員の協働をつなぐポストの確立や、学校間の若手教員同士を有機的につなぐWebサイトを始めとする体制の構築などを若手教員育成研修システムを一般化していく具体的な視点として検討していきたいと考える。

なお、各拠点校での研修の詳細を、次の「**V 資料**」に添付するので、参考にされたい。

V 資料「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業Ⅱ」の実際について

(1) 北部A小学校

ア 概要



北部A小学校

研究テーマ

思いや考えをいきいきと伝え合う子どもの育成
～意欲を高める主体的な活動を通して～

2年目教員 2名 第2学年 学級担任
第4学年 学級担任
3年目教員 1名 第3学年 学級担任

サポートチーム
H27年度拠点校(北部)
3年目教員 3名

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 2, 3年目教員への聞き取りから
- ・自分の得意ではない教科等のスキルアップを図りたい。
 - ・特別支援の視点をもった授業の課題解決を図りたい。
 - ・主体的に学び合う授業づくりを通して、子どもたちをつなげていきたい。

研究の方向性：主体的に取り組むいきいきとした子どもの姿を目指して、グループ学習等を取り入れ、協働して授業を考えていく。

6/15:校内研修での検討(模擬授業の実施)・2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導案について)

6月22日:センター研修 I ①

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究

4年国語
「一つの花」
第3場面に「一つ」「一つだけ」という言葉がない理由を考えて話し合う。

研究協議から

- ・気になる児童も含めて主体的に授業に参加できていた。指導の工夫もあるが、学級の基盤としての先生との関係づくりができていたためと思われる。
- ・考えを書きづらそうな児童もいた。児童の反応を教員が広く想定しておく必要がある。そのためにも学び合うためのツールとなるワークシート等の工夫も検討したい。



3年目教員の振り返り

「学年を越えて授業の検討をすることで、自分の考えが広がることにつながった。同世代で話し合うとチャレンジしてみようという雰囲気生まれていい刺激となった。」

9/27:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(授業構想、指導案についてなど)

10月3日:センター研修 I ②

協働学習を取り入れた授業研究

研究協議から

- ・配慮を要する児童に寄り添った指示や教具の工夫ができていた。
- ・段階を踏んだ丁寧な指導で、支援もきめ細やかであった。
- ・協働学習における話合いの視点を焦点化させる工夫を考えたい。



2年算数「三角形と四角形」
囲んでいる直線の数に着目して図形の仲間分けを行い、その理由をペアで伝え合う。

4年算数

「いろいろな四角形を調べよう」
作った図形が平行四辺形である理由について話し合う。



10/7:学年(4年)での授業検討 10/11:2,3年目の教員による協働的な授業づくり(指導案について)

10月12日:センター研修Ⅰ③

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究



4年理科
「とじこめた水
や空気」
閉じ込めた空気
を押し出したとき、
どうなるか予想
して伝え合う。

研究協議から

- ・問題意識を大切にした展開、モデルの提示などで、どの子も生き生きと実験に取り組むことができた授業になっていた。
- ・協働学習に向かう際には、どうして共に学び合うかという必然性を高める工夫が必要である。



10月末:学年(4年)での教材検討 10/26:2年目の教員による協働的な授業づくり
11/4:学校長を交えた2,3年目の教員による協働的な授業づくり(模擬授業、教具の検討等も含む)

11月7日:センター研修Ⅱ

協働学習を取り入れた授業公開



2年国語
「かたかなで書くことば」
片仮名で書く言葉を知り、
クイズを作ってペアでク
イズを出し合う。



研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

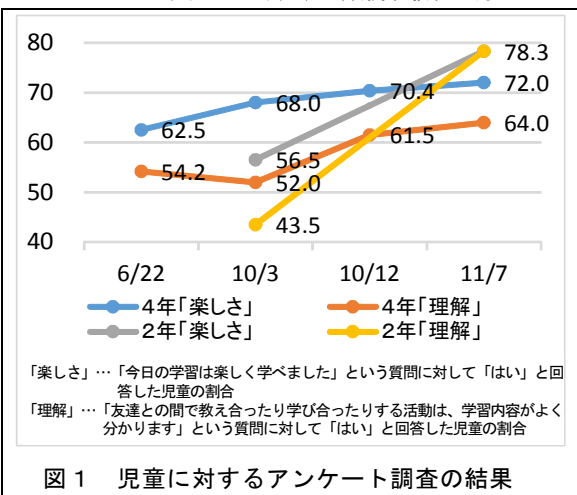
- ・確立された学習規律の中、初めに片仮名クイズをする行動目標を伝えており、配慮を要する児童にも丁寧な支援が伝わる授業だった。
- ・点の数え方を式に表す際、子どもたちから多様な考えが出てきていて驚いた。積み重ねの成果だと感じた。
- ・取組を通して先生方同士が協働性を発揮しつつ高め合い、専門性が徐々に向上していくのが伝わった。

4年算数
「式と計算」
点の数え方を工夫し
て考えて式に表し、
分かりやすい方法に
ついて話し合う。



ウ 成果

※ ここでは、2,3年目の教員が協働学習を取り入れた授業づくりを協働的に進めることを通して、児童の学びに深まりが見られたかどうかを検証することにより、2,3年目教員の授業力が向上したかという視点に絞って取組の成果を見取ることとする。(他の各拠点校においても同様に見取る)



北部A小学校では4年生担任の2年目教員が計4回、2年生担任の2年目教員が2回、授業実践を行った。実践後の児童に対するアンケート調査の結果(図1)から、どちらの学年においても、初回と最終回を比較して、「今日の学習は楽しく学べました」という質問に対して「はい」と回答した児童の割合は上昇した。理由として、「考えるのが楽しかったから。」「分かりやすかったから。」というような自分の思いのみの記述しかなかったが、回を経るごとに、「みんなで考えたのを見せ合ったから。」「相談して考え合えたから。」

というような協働学習に関わる理由を挙げている児童が目立った。また、「友達との間で教え合ったり学び合ったりする活動は、学習内容がよく分かります」という質問に対して「はい」と回答した割合も、どちらの学年においても上昇している。これらから、北部A小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習の充実を生み出し、授業力向上につながったと考える。

(2) 北部B小学校

ア 概要



北部B小学校

研究テーマ

言語活動を通して学び合う授業の工夫
～国語科の書く活動を通して～

2年目教員 1名 第4学年 学級担任
3年目教員 1名 第4学年 学級担任

サポートチーム
H27年度拠点校(北部)
3年目教員 2名

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 2, 3年目教員への聞き取りから
- ・自分自身がしていることがこれでいいの不安。国語科の指導についても力を付けていきたい。
- ・「書く」力を付け、「書く」ことを楽しみにできる子どもを育てたい。

研究の方向性: 学校のテーマ(言語活動を通して学び合う授業の工夫—自分の考えをもって、表現できる子をめざして—)に沿いつつ、協働しながら授業力の向上を目指す。

5月下旬:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導事項の理解、単元の設定)
6/15:学年(4年)での授業検討(単元の構想) 6/24:学年(4年)での授業検討(学び合いについて)
6/27:学年(4年)での授業検討(本時案、ワークシートの作成など)

6月30日:センター研修I①

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究

4年国語
「自分の考えを伝えるには」
自分の考えの理由と事例を書き、互いの意見をよりよくするために話し合う。



- 研究協議から
- ・学級経営がきちんとできており、児童が安心して学ぶ体制ができていた。指示もよく通っていた。
 - ・目標を意識して支援や助言をする必要がある。
 - ・「書くこと」の指導における話し合いは、書く内容案を出し合う際に行うと目的意識が明確になる。今後も必然性を意識して位置付けたい。

8月:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(目標の設定、単元の構想など)
9月:学年(4年)での授業検討(指導案について) 10月:学年(4年)での授業検討(本時案について)

10月12日:センター研修I②

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究



北部B小学校の校内研修と共催

- ・奈良教育大学の専門的な知見を学校全体に広めることにつながった。
- ・2, 3年目教員には、継続的に学んでいる内容を校内研究のテーマとしても再認識して学びを確認できた。
- ・サポートチームの3年目教員には、貴重な機会となり、よい刺激となった。



5年国語
「学校紹介リーフレットを作ろう」
作成した構成メモに付箋で書き込み、アドバイスをし合う。

- 研究協議から
- ・全体的に児童が落ち着いて主体的に活動していた。
 - ・付箋の使い分けをさらに工夫すると、書くための視点をより明確にできる。
 - ・アドバイスが書くための視点となっていたか評価する必要がある。

2年目教員の振り返り
「若手同士で悩み、試行錯誤することはとても大切に感じた。学びながら授業の在り方をどんどん改善されていく様子を見て、同じ若手教員として刺激を受け、自分も頑張ろうと思った。」

10月:2,3年目の教員による協働的な授業づくり(目標の設定、モデル文の作成など)
 10月:学年(4年)での授業検討(指導案について) 11月:学年(4年)での授業検討(本時案について)

11月15日:センター研修Ⅰ③

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究



4年国語
 「プラタナスの木」
 感じたことをグル
 ープで伝え合い、
 考えを深める。

研究協議から

- ・児童が話し合いの意味を理解し、主体的に活動できていた様子が印象的で、話し合う力も高まってきている。
- ・「書くこと」に重点を置いた感想文の指導として、モデル文の提示等の支援を考える必要がある。



11月初旬:2,3年目の教員による協働的な授業づくり(目標の設定、指導計画についてなど)
 11月中旬:学年(4年)での授業検討(指導案について) 11月授業前:学年(4年)での授業検討(本時案について)
 適時:サポートチーム3年目教員との授業づくり(メール等による助言、意見交流、励ましなど)

11月29日:センター研修Ⅱ

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究



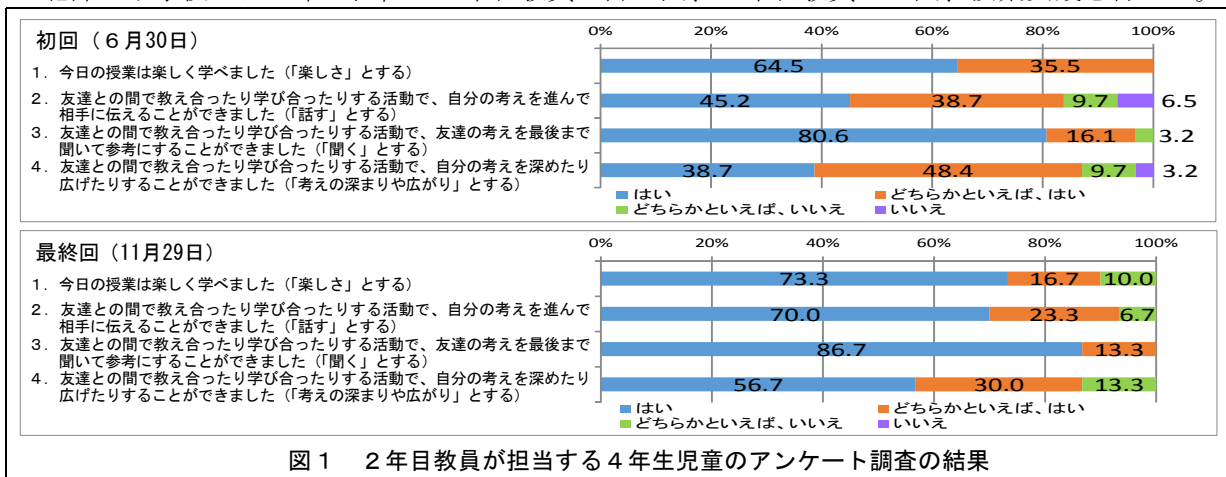
4年国語
 「クラブ活動リーフ
 レットを作ろう」
 互いの構成メモを読み
 合い、グループでアド
 バイスをし合う。

研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

- ・互いを認め合う学級経営ができていて、書くための話し合いを対話的に進めていたのがすごいと思った。自分もこの研修を受けたいと感じた。
- ・児童の成長と先生の授業力向上を実感した。互いが評価したことを後に丁寧に振り返ることで学び合いのよさが実感できる。教員も定まった評価指標をもとに自身を振り返ることで、学び続けることを大切にしたい。

ウ 成果

北部B小学校では4年生担任の2年目教員が計3回、3年目教員が1回、授業実践を行った。



2年目教員が行った研究授業における初回と最終回での児童に対するアンケート調査の結果(図1)から、各質問項目とも初回に比べて最終回の11月の段階では、肯定的な回答の割合が増加していることが分かる。特に質問項目2「話す」で「はい」と答えた児童の割合は24.8ポイント上昇しており、主体的に授業に参加できてきたことが見て取れる。また、同調査における3年目教員の担当した児童の記述には、「教え合うことが楽しいと気付いた」「勉強になったからまたやりたい」「自分の考えがもっとよくなる」などの協働学習のよさへの気付き、主体的に学び合おうとする姿勢がうかがえる内容が見られた。これらのことから、北部B小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習の充実を生み出し、授業力向上につながったと考える。

(3) 中部C小学校

ア 概要



中部C小学校

研究テーマ

自らの考えをもち、豊かに学び合う子どもの育成を目指して
～子どもたちが主体的・協働的に学び合う授業づくりについて～

2年目教員 1名 第3学年 学級担任
3年目教員 2名 第1学年 学級担任
第5学年 学級担任

サポートチーム
H27年度拠点校(中部)
3年目教員 3名

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 2, 3年目教員への聞き取りから
- ・3回のセンター研修Ⅰの機会を生かして、3人で1人1回ずつ授業をして、協働的に学び合いたい。
- ・1, 3, 5年担任で系統性も学べるので、同じ教科の算数科で研究をしたい。

研究の方向性:自分たちなりの協働学習のもち込み方を研究するため、算数科の共通性をもちつつも、型にはまらず自由に考え合い、協働的な授業づくりに取り組む。

- 6/3:2, 3年目の教員と学年(3年)による授業づくり(単元の設定、本時案についてなど)
- 6/15:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(本時案について、教材づくり)
- 6/17:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(めあて、板書計画、本時の流れの確認など)

6月20日:センター研修Ⅰ①

第3学年の協働学習を取り入れた授業研究



3年算数
「計算のくふう」
3口の計算の仕方について自分の考えを伝え合う。

研究協議から

- ・2年目教員の取組への姿勢、3年目教員の支援や助言から、センター研修が意義深いものとなっている。
- ・単元構成時には、さらに目標を明確にし、学習段階に沿う活動設定や教具等の在り方を大切にしたい。



3年目教員の振り返り

「これまでどれだけ学年の先生に頼っていたか分かった。自分なりの考えを絞り出す大切さを学んだ。」

サポートチーム3年目教員の振り返り

「2年目の時より少しだけ自信をもって協議の中で意見を言うことができ、自分の成長が感じられた。」

- 8/29:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(目標の設定、単元の構想、教材・教具の選定など)
- 10/11:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導案・本時案について、発問検討など)
- 10/14:学年(5年)による授業検討(授業の進め方の確認、学年教員からの助言など)

10月18日:センター研修Ⅰ②

第5学年の協働学習を取り入れた授業研究



5年算数「三角形の面積」

三角形の面積の求め方について自分の考えを説明し合い、知ってほしい考え方を話し合って決める。

研究協議から

- ・ベースの考えが消えない効果的で活用度の高い教具で、グループ活動にも相応しかった。
- ・学び合いを成立させるために、個への支援と集団の学びを深める仕掛けが必要である。

2年目教員の振り返り

「5年生の授業と一緒に考えることで、単元の縦のつながりを意識することができ、勉強になった。」

11/4:2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(本時の展開の具体について)

11月8日:センター研修Ⅰ③

※ センター研修Ⅱは2年目教員の授業公開となっているが、中部C小学校では、1年生担任の3年目教員にも公開いただいた。

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第1学年の授業》

- ・算数「ひきざん」の学習で、繰り下がりのある引き算の計算の仕方をペアで考え合うような活動に取り組む。
- ・足し算の学びから10のまとまりを意識させて数の分解に慣れさせたい。

《第3学年の授業》

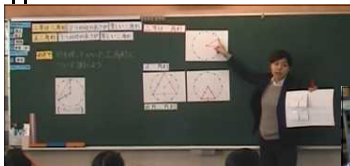
- ・算数「三角形と角を調べよう」の学習で、円の中心や円周上の点を使って作図した三角形を調べて話し合うような活動に取り組む。
- ・学ぶ素材のスケールを考慮して活動内容や授業形態を吟味したい。



**11/11、11/17:2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(11/8の研修を受けて本時案の再構築、確認など)
11/24:2. 3年目の教員と学年(3年)による授業づくり(模擬授業、教具づくりなど)
適時:立ち話やメモ書き等による相談、サポートチーム3年目教員との授業検討(メール等による助言など)**

11月29日:センター研修Ⅱ

協働学習を取り入れた授業公開



3年算数
「三角形と角を調べよう」
作図した三角形の仲間分けをして、それぞれの共通点について話し合う。



1年算数「ひきざん」
10のまとまりを意識して、繰り下がり
の計算の仕方をペア
で考え合う。



研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

- ・具体物を豊富に取り入れた授業で、児童にとって主体的に学ぼうとする場が提供されていた。
- ・協働的に学ぶための意図のある授業構成で、学び合いが円滑に進む配慮も考えられていた。
- ・学習規律があり、それでいて和やかな雰囲気の中で学びを成立させる学級経営力と授業力が年間を通して向上してきたことが授業から見て取れた。

ウ 成果

中部C小学校では3年生担任の2年目教員が計2回、3年目教員が1回ずつ授業実践を行った。

表1 協働学習のよさについて自由記述した初回と最終回の内容の比較(一部の抽出児童)

友達との間で教え合ったり学び合ったりする活動のよさを自由に書きましよう

児童	初 回 (6月20日)	最 終 回 (11月29日)
A児	楽しいからもつとしたいです。	友達と考えると楽しいから。自分の意見がもっと分かりやすく伝えやすくなるから。
B児	みんなで考えられる。	友達どうして分からない考えを話し合えるところ。
C児	みんなに聞きやすい声で発表してくれるから。	自分たちの班だけでなく、他の班の考え方も勉強できるから楽しい。
D児	みんなきちんとしてくれる。	ここをこうしようとか、みんなでもっといい考えを出しているように思います。
E児	楽しく勉強できる。	友達の意見は自分が分かっていないところがあってそこがいい。
F児	自分の考えを発表できるし、友達の考えも聞けるから。	友達の意見を聞いてみると、こんな考え方もあるんだなって思えること。
G児	みんな意見を言うこと。	友達の意見を聞いて、こうやったらできるんだと、勉強になっています。
H児	教えたり、助け合ったりするのがいい。	いろんな意見が考えがいろいろ出てくること。

2年目教員が行った授業実践の児童に対するアンケート調査において、協働学習のよさについて自由記述した初回と最終回の内容を比較したものが表1である(一部の抽出児童のみ)。初回では、よさにつながっていなかったり、よさへの気付きが浅く漠然としたものであったりする記述が目立つが、最終回では、より具体的に学び合うことによる考えの深まりや広がりについてそれぞれの児童なりに言及していることが分かる。また、同対象調査の質問項目「友達との間で教え合ったり学び合ったりする活動で、自分の考えを深めたり広げたりすることができました」で「はい」と答えた児童の割合が54.8%から63.3%に上昇した結果も見られ、協働的な学びが思考の活性化を生み出すことに児童自身が自覚していることがうかがえる。さらに3年目教員の担当した児童対象の同調査においても、協働学習に対しての自由記述で肯定的な回答が目立った。これらのことから、中部C小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習の深まりや広がりを生み出し、授業力向上につながったと考える。

(4) 中部D小学校

ア 概要



中部D小学校

研究テーマ

主体的に学び続け、心豊かにたくましく生きる子どもの育成を目指して
～まなびあい・そだちあう～

2年目教員 第1学年 学級担任 第5学年 学級担任
第6学年 学級担任 3名
3年目教員 第2学年 学級担任 第3学年 学級担任
第4学年 学級担任 3名

サポートチーム

H27年度拠点校(中部)
3年目教員 3名

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 2, 3年目教員への聞き取りから
- ・自分が専門的に学んでいきたい教科等のスキルアップを図りたい。
- ・学級の実態に応じて、話し合い、教え合い、学び合いを取り入れた授業を構築できるように努めていく。

研究の方向性：学校のテーマ（センター研修の研究テーマと同じ）に沿いつつ、協働しながら自分の専門性を見据えて授業力の向上を目指す。

6/9、6/15:学年(6年)による授業検討(指導案について)

6/17:2年目の教員による協働的な授業づくり(単元の流れの確認、評価についての検討など)

6/21:学年(6年)による授業検討(本時案について)

6月22日:センター研修 I ①

第6学年の協働学習を取り入れた授業研究

6年社会
「3人の武将と天下統一」
火縄銃を撃つ時間をカバーした工夫について話し合う。



研究協議から

- ・資料や掲示物の工夫や児童とのやり取りから、学ぶ意欲の醸成を意識した授業となっていた。
- ・知識として説明して教える割合が高かった。児童に協働して学ぶための意義をもたせる必要がある。

2年目教員の振り返り

「若手教員同士で話し合いをする際、学年で話が進んでいると意見が言えなくて難しいと感じた。計画的に学年と連携を取ったり、一緒に検討したりしながら話を進めていくことが大切だと感じた。」

9月:学年(5年)による授業検討(指導案、本時案について) 適時:2, 3年目教員と個別に意見交流

9月20日:センター研修 I ②

第5学年の協働学習を取り入れた授業研究

研究協議から

- ・チームの中で掛け声を出したり、失敗した点について話し合ったり、それぞれが主体的に活動できていたように感じた。
- ・バトンパスを工夫してつなぎ、いかに短縮できるかがメインの学びであったが、準備運動を含めた全ての活動が「走・跳運動」に結び付くように意識して授業構成することが大切である。

5年体育

「つないでゴール!バトンパスリレー」
バトンパスにおけるタイムを短縮する工夫についてグループで話し合う。



2年目教員の振り返り

「児童の感想から、自分たちで協働していくことによる意欲の高まりが感じられ、協働学習の効果に驚いた。」

10/11:2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導案、評価の在り方についてなど)

10月19日:センター研修Ⅰ③

第1学年の協働学習を取り入れた授業研究



4年図画工作
「でこぼこ発見フェスタをしよう！」
紙粘土に写し取った「でこぼこ」の形を友達に紹介し合う。

研究協議から
・児童同士が写し取った「でこぼこ」を紹介して共有したときに、多様な表現を引き出す工夫が大切である。
・児童の発達段階に応じて、段階的にステップアップするようにグループサイズを決定したい。



3年目教員の振り返り
「図工の評価という難しいテーマについて、若手同士で意見交流できたことが新鮮で、貴重な経験になった。」

**11月初旬:2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(体育の指導案について)
11月中旬:2年目の教員による協働的な授業づくり(互いの指導案についての相談、意見交流など)
適時:学年集団による授業検討(本時案や授業の流れの確認、先行授業、学年教員からの助言など)**

11月7日:センター研修Ⅱ

協働学習を取り入れた授業公開



6年国語「読みやすい紙面構成を考えよう」
配列と筆記具の工夫で読みやすくした紙面を見せ合い、その工夫について友達と意見交流をする。



5年体育「大きな台上前転」
グループで台上前転のコツを伝え合いながら、自分が挑戦するコースについて相談する。

1年図画工作「ならべてつんで」
木切れを並べたり積んだりして、作った物を具体物に見立てて友達と発表交流する。



研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

- ・授業中の児童の具体的な姿を想定して、目指す目標に向けた支援の手立てや工夫を熟考しておくことが大切である。
- ・個々の児童のつまずきを発見できるような指導の在り方を考えて、丁寧に実態を見取って支援する力を伸ばしてほしい。
- ・協働学習において児童の学びの方向性を律するために、ゴールへ向かう筋道を整理して相応しい指示や発問を吟味したい。



ウ 成果

中部D小学校では3人の2年目教員がセンター研修Ⅰごとに1回、最終のセンター研修Ⅱで1回、計2回の授業実践を行った。初回と最終回での児童に対するアンケート調査の結果(図1)から、各学年において、どちらの質問項目も初回と最終回を比較して、肯定的な回答の割合が増加していることが分かる。教員同士が協働学習を取り入れた授業づくりを進めてきたことで、児童自身が意識できる程に協働学習の機会が普段から設けられてきたこと、また、仲間と主体的に関わり、楽しく学ぼうとする意欲が高まってきたことがうかがえる。これらのことから、中部D小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習に対する主体的な態度を生み出すことにつながり、授業力が向上したと考える。

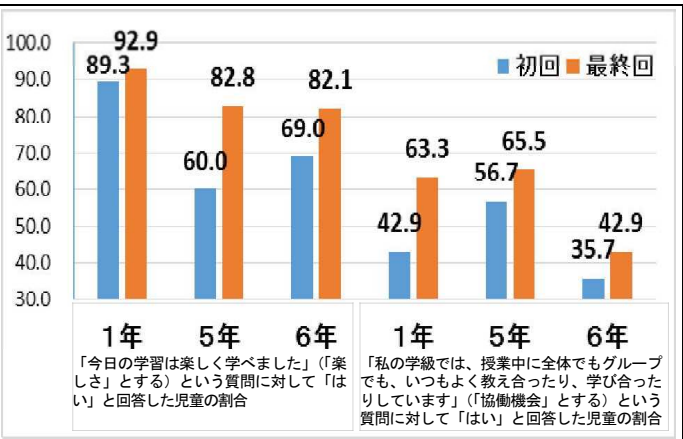


図1 2年目教員が担当する児童のアンケート調査の結果

(5) 南部E小学校

ア 概要



南部E小学校

研究テーマ

自ら考え、いきいきと伝え合う児童の育成

～子ども自身が見通しと自分の考えをもてる算数科の学習を通して～

2年目教員 1名 第3学年 学級担任

3年目教員 1名 第5学年 学級担任

サポートチーム

H27年度拠点校(南部)

3年目教員 2名

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 2, 3年目教員への聞き取りから
- ・問題解決のために粘り強く考える力や、根拠を明らかにして伝え合って考えを深める力を育てたい。
- ・算数の学力の2極化を解消し、全員の子どもが「分かった!」と言える授業を目指したい。

研究の方向性: 課題を明確にし見通しや自らの考えがもてる問題解決型の授業展開を構成し、算数的活動を取り入れて学ぶ意欲の向上を目指しつつ、主体的・協働的な学び合いを行う。

5月下旬:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(単元の設定) 6/8:学年(3・4年)での授業検討 6月中旬~随時:担任外教員を交えた2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(教具作り, 発問の確認など)

6月28日:センター研修I①

第3学年の協働学習を取り入れた授業研究

3年算数「大きさをグラフに表そう」棒グラフの配列の仕方についてペアで考えを伝え合う。



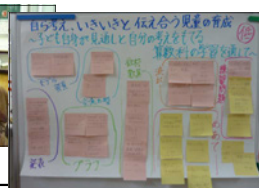
研究協議から

- ・単元を通して教材や掲示物など、学びに向かう環境が丁寧に整えられており、児童が最後まで授業に集中して取り組んでいた。
- ・目標がぶれてしまわないよう、児童の思考に寄り添いつつ、適時適切に支援や助言をすることが大切である。



南部E小学校の校内研修と共催

- ・算数的活動の充実に向けて、専門的な知見を学校全体に広めることにつながった。
- ・2, 3年目教員にとって、センター研修での学びと校内研究のテーマとを関連付けることができ、より深い学びとなった。



7/28:サポートチーム3年目教員との授業検討(単元、指導案についてなど)

8月末:2, 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導案、展開における導入についてなど)

9/2, 9/5:2, 3年目の教員と学年(5年)による授業づくり(本時案の確認)

9月8日:センター研修I②

第5学年の協働学習を取り入れた授業研究

研究協議から

- ・何が問題でどんなことを考えるかが明確で、児童が見通しや考えを立てやすい展開であり、協働による学びで思考に深まりが見られた。
- ・協働で授業づくりをする際、教材解釈、予想される反応等を熟考し、授業の中心の設定や内容について議論することが非常に大切となる。

5年算数「整数の性質を調べよう」公倍数の求め方について自分の考えをペアで伝え合い、全体共有した後、より簡単な方法についてさらにペアで話し合う。



3年目教員の振り返り

「いろいろな先生方から意見をいただき、自分の学びが深まったように感じた。取り組めて楽しかった。」

9/27、10/3:学年(3・4年)での授業検討(単元の設定、本時の目標、展開についてなど)
 10/12:2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(指導の焦点化についての相談など)
 10/20:担任外教員を交えた2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(本時の場面ごとの確認など)

10月21日:センター研修 I ③

第3学年の協働学習を取り入れた授業研究



3年算数
 「わり算のしかたをさらに考えよう」
 各位で整除できる計算の仕方をペアで話し合う。

研究協議から

- ・主体的に学べるように綿密に考えられた授業で、協働学習においても日頃の指導の積み重ねがよく表れていた。
- ・45分の中で目標を重点化するために、協働学習で交流する内容をねらいと一致させることも考えられる。
- ・感覚的な理解を確実にするために、適応問題に取り組む時間の確保を心掛けたい。



2年目教員の振り返り

「一緒に考えてもらうことで授業の見通しをもつことができた。精神面でも大きく支えていただいた。」

11月上旬:学年(3・4年)での授業検討(指導案の修正、本時案、単元を通して使う教具についてなど)
 11月中旬～下旬の適時:担任外教員を交えた2. 3年目の教員による協働的な授業づくり(展開の検討、相談)

11月29日:センター研修 II

第3学年の協働学習を取り入れた授業研究



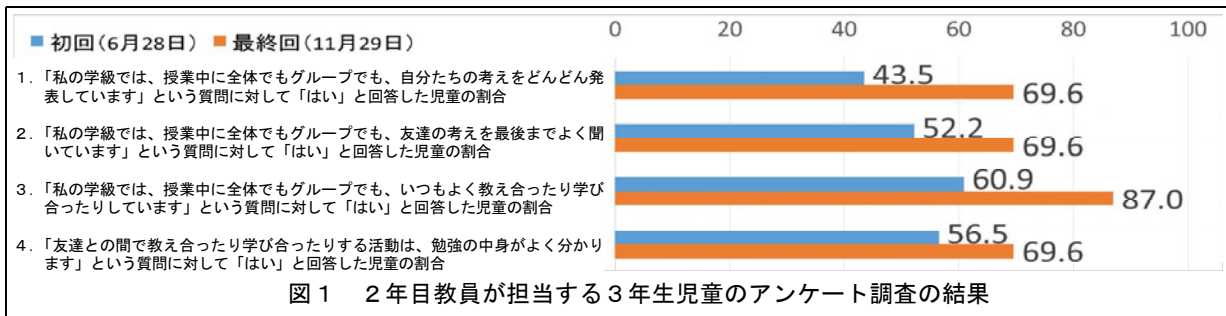
4年算数
 「1より小さい数を表そう」
 小数のたし算の計算の仕方を考えてペアで伝え合い、全体交流する。

研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

- ・協働学習が児童の考えを深めさせたが、そのための仕掛けや支援が様々な準備、配慮されており、反応に応じた指導も細やかで勉強になった。
- ・先生が丁寧に児童の言葉をつないできたことで、協働的な学びを支える児童同士の関係性ができ、生き生きと考えを伝え合うことができていた。

ウ 成果

南部E小学校では3年生担任の2年目教員が計3回、3年目教員が1回、授業実践を行った。



2年目教員が行った研究授業における初回と最終回での児童に対するアンケート調査の結果(図1)から、各質問項目とも初回に比べて最終回の11月の段階では、肯定的な回答の割合が上昇している。協働学習の機会が増えたことに伴って自らの考えを生き生きと伝え合い、学習内容の理解を深めてきたことを児童自身が意識できていることがうかがえる。また、同調査における3年目教員の担当した5年生児童の協働学習のよさについての自由記述の中には、「考えが深まる・広がる」「友達と同じ意見だと自信がもてる」「他の考えも発見できる」「創造が広がる」などの言葉や語句が多く見られ、自分と友達の考えを関わらせて多様に表現できていた。これらのことから、南部E小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習の充実を生み出し、授業力向上につながったと考える。

(6) 南部F小学校

ア 概要



南部F小学校

研究テーマ

主体的に活動し、学び合う子どもの育成を目指して
～学び合う授業づくりを通して～

2年目教員 2名
第2学年 学級担任
第4学年 学級担任
3年目教員 0名

サポートチーム(F校同村内若手教員6名)
F校同村立①小学校 2名
F校同村立②小学校 1名
F校同村立③小学校 1名
F校同村立③中学校 2名
(このうち小学校2年目教員は3名)

イ 実際

5月:事前打合せ

チームの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性について

- 南部F小学校の2年目教員への聞き取りから
- ・算数の授業において研究に取り組み、子ども同士が主体的に学び合いを進めていくような力を育てたい。
- サポートチームへの聞き取りから
- ・人数も多く複数校存在しているので、協働的に授業づくりができるか心配である。
- 大学教員の参加体制
- ・現地での指導助言とテレビ会議システムを通じた交流と両方で行う。

研究の方向性：主体的に学び合いを進める算数科の授業づくりを進める。チームとしては、メンバー全員が目的意識をもって自分の授業のつもりで主体的に協働する。

6/27:2年目の教員による協働的な授業づくり(単元、本時の目標の設定、本時案の作成など)
7/6:サポートチームとの協働的な授業づくり(指導案検討、展開構想、模擬授業など)

7月11日:センター研修I①

第2学年の協働学習を取り入れた授業研究



2年算数
「()を使った計算」
3口の計算の仕方を工夫して考え、お互いの意見を交流する。

テレビ会議システムを導入して、奈良教育大学からも授業に対して指導助言をしていただく。(4回とも全て)

研究協議から

- ・どんな力をつけたいか、本時のゴールをさらに明確にして、授業の構成や展開を熟考すべきである。
- ・興味や関心を高めていた導入を児童の知識理解へと結び付けるように活用すると問題解決型の展開となる。



2年目教員の振り返り

「1つの授業をみんなで考えることが大切だと感じた。次々といろんな考えが出てきて面白かった。」

サポートチーム2年目教員の振り返り

「職場が先輩教員ばかりなので、一緒に授業を練っていく経験が初めてで学びになると感じた。」

8/3:サポートチームとの授業検討(指導案の検討) 8/24:大学教員と相談(学び合いについてなど)
8/25、8/30:サポートチームとの協働的な授業づくり(授業の流れ、発問などの確認、模擬授業)

9月12日:センター研修I②

第4学年の協働学習を取り入れた授業研究



4年算数「いろいろな四角形を調べよう」
平行四辺形の辺や角の大きさなどを調べて、気付いたことを友達と交流することから平行四辺形の性質について考え合う。

研究協議から

- ・問題解決型の授業構想がしっかりと練られており、一人一人に丁寧に支援できていたので、児童は主体的に集中して取り組んでいた。
- ・互いに声を掛けて進める協働的な学びの在り方が自然でよかった。
- ・本時のめあてに関わり、発問の仕方や「ひみつ」、「調べる」等の言葉の捉え、目標との合致などについて、教員自身が明確にする必要がある。



9/12、9/20、9/23:2年目の教員による協働的な授業づくり(単元の設定、本時案作成、模擬授業など)
 9月中旬～下旬の適時:サポートチームとの授業検討(メール・電話等による助言など)
 9/27～10/5:2年目の教員による協働的な授業づくり(指導案、展開、発問等の練り直し)

10月6日:センター研修 I ③

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第2学年の授業》

- ・算数「かけ算(2) 新しい九九の作り方を考えよう」の学習で、九九の表の一部を見て、気付いた「きまり」を出し合い、これからの九九について興味や関心を高めつつ、「きまり」から6の段を類推する。
- ・予想される児童の反応をできる限り挙げて想定しておきたい。
- ・児童の多様な意見を受け止めつつ、どのように整理して扱っていくか考えておく必要がある。
- ・6の段を考えると時の手掛かりは、児童が出した意見の中のどのようなものが相応しいのか、またそれを分かりやすくする工夫や仕掛けを考えておくことが大切である。



10月中:2年目の教員による協働的な授業づくり(本時案、発問等について、模擬授業など)
 10月数回:サポートチームとの授業検討(本時案について、模擬授業など) 10月:指導主事との授業検討

11月7日:センター研修Ⅱ

第2学年の協働学習を取り入れた授業研究



2年算数
 「かけ算(2)新しい九九の作り方を考えよう」九九の表(一部)を見て、気付いたことを友達と交流し合う。

研究協議・奈良教育大学の先生の講義等

- ・子どもたちが多くの気付きをしようとしてよく考えていた姿が印象的だった。また発表交流の場面では、互いの発表をしっかりと聞こうと努めていた。
- ・指導事項を獲得できたか評価するうえで目標が設定される。その目標到達のために児童にめあてをもたせるので、目標とめあてに齟齬がないように何をどう学ばせるのか、教員の確実な指導事項の理解と教材解釈が必要である。



ウ 成果

南部F小学校では、2年生担任の2年目教員が2回、4年生担任の2年目教員が1回、授業実践を行った。2年生の最終回の調査結果を初回と比較できる形式にして児童別に表したものが表1である。これを見ると学級全体として肯定的な回答が増えていることが分かる。C児は質問項目の回答に変化はないが、協働学習に対する自由記述欄に「みんないっぱい(気付いたことを)書いていてすごいと思いました。」というような友達の気付きを見つめる姿がうかがえた。また、D児も項目3ではより否定的な回答になったものの、「もう少し(意見を)話したかった。」と主体的に協働学習に取り組もうとする意欲が伝わる記述が見られた。

表1 2年生児童のアンケート調査の結果

質問項目	A児	B児	C児	D児	E児
1. 今日の勉強は楽しく学べました	1	①	2	1	(1)
2. 友達と一緒に、教え合ったり学び合ったりしたとき、自分の考えを進んで話しました	1	1	1	①	(2)
3. 友達と一緒に、教え合ったり学び合ったりしたとき、友達の考えを最後まで聞いて勉強になりました	1	①	2	②	(1)
4. 友達と一緒に、教え合ったり学び合ったりしたとき、自分の考えが今までよりはっきりになって、賢くなったように思います	①	2	2	1	(2)

※「1」…「はい」「2」…「どちらかといえば、はい」(7月の調査結果よりも肯定的な回答になったもの「○」、否定的な回答になったもの「●」、7月の授業を欠席して調査を受けていないもの「()」

また、同調査における4年生児童の協働学習に対する感想の中には、「自分と違ういろんな考え方があった」「友達の考えが面白いなと思った」「自分が見つけれなかったことを友達が見つけていてすごいなと思った」など、自分と友達の考えを関わらせることで自分の考えが広がり深まったりすることへの気付きとなるような内容の記述が見られた。これらのことから、南部F小学校で行われた協働的な授業づくりが、児童の協働学習に対する意識の高まりを生み出すことにつながり、授業力が向上したと考える。

IV その他

[キーワード] 小学校若手教員、アクティブ・ラーニング、学び合い、拠点校、大学連携、研修システム、授業づくり、Webサイト、校内研修、OJT

[人数規模] D (詳細人数は5ページを参照)

[研修日数]	D	(センター研修Ⅰ	4回〔事前打ち合わせ含む〕×6拠点校	24回)
		(センター研修Ⅰ	2,3年目教員の主体的・協働的な研修	随時)
		(センター研修Ⅱ	全体研修と共催① 2日間(3講座)	2日)
		(センター研修Ⅱ	全体研修と共催② 1日間(2講座)×6拠点校)	6日)
		(センター研修Ⅱ	Webサイト上での主体的・協働的な研修	随時)

【問い合わせ先】

奈良県立教育研究所

教育経営部 研修企画係

〒636-0343 奈良県磯城郡田原本町秦庄22-1

Tel:0744-33-8905 (ダイヤルイン)

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

Tel:0742-27-9240 (前田研究室)